

Title	古今灌頂解題稿
Sub Title	
Author	石神, 秀美(Ishigami, Hidemi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1993
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.28 (1993. ) ,p.77- 137
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本隆信名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000028-0077">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000028-0077</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 古今灌頂解題稿

石 神 秀 美

前稿「玉伝深秘卷解題稿」に引続き、同種の歌道伝授書、主に柿本人麻呂に関する秘事を集めた「古今灌頂」を同体裁で解説する。前稿とともに井上宗雄・片桐洋一・新井栄蔵・三輪正胤氏ら先学の成果に負うところが多い。特に、諸本間の関係を叙べて、三輪氏の御論「古今集灌頂伝授の一系譜」（国語国文学論集 松村博司教授定年退官記念 昭和48 名古屋大学国語国文学会）が詳細である。後記神宮文庫蔵A本——本文冒頭題に依り標示すれば、「古今灌頂」。外題は「和歌古今灌頂巻」とする——を藤原為頭流に発した原形と見、他流の改編付加を経て、所謂「古今灌頂巻」「古今和歌灌頂巻」「古今和歌集相伝抄深秘密勘」へと順次展開してゆく、と考えられた御論旨（取

意による要約）に、筆者も、現在大綱に於ては余り異論もない。ただ、目指すべきこの種の伝書の包括的理解の前提としては、諸本間の関係に対する筆者個人の見通しが不可欠なので、敢えて私見を取纏めることにした。主として諸本の現状の報告とそれに併せて、三輪氏の御論旨のもとに、卑見を交えながら、所収内容の細目・同対照表を作り、テキストの変遷の跡をやや仔細かつなるべく平明に辿ったのが本稿である。

ところで本書もそのあり方に異なった様相を呈しはするが「玉伝深秘巻」同様、秘事秘伝の諸項の集合から発していると推定する。神宮A本の冒頭近くに十項目、二類本に七項目にわたる伝授内容の目録があることがその有力な証左となろう。

とはいうものの、秘事を一項ずつしるす草子を複数集成した初めの形態が、比較的容易に推測しうる所謂「玉伝深秘卷」の場合と異なり、推測の強力な根拠となった、冷泉家の和歌草子目録や立論に好都合な異本やに類するものの存在しない本書に於ては、実はそのものとあり方が単純には把握し得ない憾みが残るのである。そもそも、原点に位置するものと判断されている神宮A本にしても、一種の混乱乃至現時点で十分解き切れないう不可解さが存している。つまり「玉伝深秘卷」と全く同じ意味での、秘伝草子の集成である、とは必ずしも断言できないような形態下に神宮A本はある。

確かに神宮A本にはその巻頭近くに、別記の内容細目に付記する伝授目録を掲げていることは前言の通りである。仮にそれ以下が、対応する諸項が整然と区分されて小題とともに配されているものなら、本来各項は草子類似の形態の、各個独立のものであった蓋然性は高いと推測してよからう。だが実際には、神宮A本の本文に、小題による区分などは殆ど全くなく、類似する難解な言説が特に切れ目もなくだらだらと続いており、目録通りの諸項が完具するのかどうか、厳密には判断不能であるといわざるを得ない。

勿論文中で目にとまる要語は、自ずから一つの傾向性をもって偏在しているから、部分々々の主題を指標として全体を緩かに区分することはできそうであり、同時に冒頭の伝授目録とひき比べて対応するかどうかの、凡その推定をつけることもできそうではある。しかしそれにしても、実際にこうした作業をはじめてみると、次第に昂ずる困惑の念も覚えざるを得ない。つまり、巻上に於ては目録に近い区分が比較的簡単である一方で、巻中以下になると行文がやや混沌化するかの印象が強まり、目録と対応する部分が確定できなくなる。強いて本文を分けるなら時に目録を離れ、二・三類本の区分をも睨みながら、本文に即してよろしきように分割する以外にない。

おそらく、想定される草子集成的原形をもととして、神宮A本を三巻仕立ての現形態に纏めた編者乃至口授者には、臆測するに、巻上に看取される、目録に依りつつ、秘事の数々になるべく区分をつけながら語ろうという意志とは逆に、中途からは、相互に無関係ではない諸項を、達意的に突き交ぜて語ろうという、別の意志が同時にはたらき始めているのではなからうか。志向するところが二方向に分裂していることが、現形態の、全体に混沌として重複が多いことの根本的原因と想像す

る。従って、冒頭の目録通りに各項が整然と配されている、草子集成的原形か、あるいはその特徴を色濃く留めた「古今灌頂」のようなもの、の出現が見込めそうもない現状では、「玉伝深秘卷」のテキスト変遷の経過を示した前稿、つまり秘事を一項ずつ個別の草子に記し、集成して一書とした原形から、折々の増補削省改編を被りつつ諸本へと分岐してゆく過程を示した前稿と、全く同じ方法で、前稿なみに、「古今灌頂」の変容を明瞭に表示することは、聊か困難といわなければならないだろう。

それにもかかわらず、全く同様に、本文に細区分を与え、内容細目の対照表を敢て示しするのは、神宮A本と二・三類本とが、三輪氏もいわれるようにほぼ全くの同文を含んでいて、何らかの関係があることは疑い得ないからであり、また、原形が草子であったかどうかの判断はできないまでも、適切に神宮A本に区分を与えるならば、その各部分が他の諸類にいかなる状態で含まれ、変容するのかを表示することはできようと先ず考えたからであった。それがどんな結果であったかは細目と対照表にしるした通りで、諸本解題にも言及するところがある。

そしてそのように区分された内容の細目を見ながら、更に気

付かせられることがいくつもある。第一類本第二類本においては、伝授目録の諸項を一括し、どうやら「古今灌頂」と呼称しているらしいこと。第三類本では、第一・第二類本の内容に対応する部分の尾に「為助」の奥書が付いて、それ以下と区別されているらしく思えること。即ちそれ以下は副次的な増補部らしいこと。第四類本では「古今灌頂」がごく簡単に約められる半面、むしろ増補部に関心が移り項目に増加がみられること、などである。

このうち、三類・四類の増補部は、人麻呂詠を軸に展開する「古今灌頂」とことなり、古今集序・卷十・卷廿の本文に、比較的即した注文であるといつてよからう。無論、歌の字義を考証的に積する後世の古今注とはちがって、「実は……」式にある歌の秘密を密教教理を援用しなどして明らかにゆくその精神態度には、前とそれほどの差がない。とはいえその形態面には明確な一つの断絶があると考えてよいと思う。いつ加わったのかはわからないが、この点からも増補部と断じ得よう。

第三類第一系本でいえば、第9項より最後の第26項までがそれである。

第四類本に於ては、第三類本増補部の一部が落ち、かわって

後記細目に( )を以て括った数字で示す諸項が増補される。現在の目でみて妥当性を欠く、という点で似たり寄つたりの説ではあるが、宮中の行事やしきたりに詳しく言及する点に特色がある。第8項に関連づけられた第(9)項から第(18)項までがその新たな付加部分で、細目を見るといかにも無理矢理に割り込ませた、やや不自然な形態である印象がつよい。

ところでこうした増補が肥大化している伝本をも、本稿の如く「古今灌頂」と一概に呼んでしまうのは、果して適切ななか、少々判断に躊躇するところでもある。新しい書として認定し、各類冒頭題をとるなりして個別の書名を用いるべきではないのか。しかし筆者は現在のところ、この種の伝書群を一望する総称はなお必要だという判断に傾いている。各個の関連を断ち切ることなく、一群として扱うべきだと考えるからである。便宜上もつとも中核をなす秘説部分、即ち「古今灌頂」を汎称としても用いておくこととする。

以下、諸本解題・内容細目・同対照表の順で稿を進める。内容への言及は後日を期する。

## 諸本解題

現存諸本を分類するなら次の通りである。

### 第一類

神宮文庫蔵A本(神宮A本)

### 第二類

第一系 静嘉堂文庫蔵本(静嘉堂本)

天理大学附属天理図書館蔵本(天理A本)

曼殊院蔵A本(曼殊院A本)

第二系 宮内庁書陵部蔵A本(書陵部A本)

### 第三類

第一系 大東急記念文庫蔵本(大東急本)

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本(斯道本)

天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵本(天理B本)

国文学研究資料館初雁文庫蔵A本(初雁A本)

宮内庁書陵部蔵B本(書陵部B本)

宮内庁書陵部蔵C本(書陵部C本)

宮内庁書陵部蔵D本(書陵部D本)

香川大学付属図書館神原文庫蔵本(香大本)

九州大学附属図書館細川文庫蔵本（細川本）

第二系 国立公文書館内閣文庫蔵本（内閣本）

神宮文庫蔵B本（神宮B本）

曼殊院蔵B本（曼殊院B本）

#### 第四類

京都大学附属図書館中院文庫蔵A本（京大A本）

京都大学附属図書館中院文庫蔵B本（京大B本）

祐徳稻荷神社蔵本（祐徳本）

群馬大学附属図書館蔵本（群大本）

八戸市立図書館蔵本（八戸本）

国文学研究資料館初雁文庫蔵B本（初雁B本）

国立国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫蔵本（岩崎

本）

宮内庁書陵部蔵E本（書陵部E本）

上記した諸本以外にも、三類本と判断される伝本には、高野

山大学に三部（井上宗雄氏『中世歌壇史の研究』・三輪氏前掲論

文・『高野山 国文学・国語学  
中国文学・語学 文献目録』に依る）、九州大学国語学

国文学研究室に一部、陽明文庫に一部（二系本 『曼殊院蔵古今

伝授資料第二巻』解題に依る）、四類本には、東北大学に一部

（井上氏・三輪氏に依る）を所蔵する由だが原本・複写本共に筆者は未見である。また冒頭の「古今灌頂」部は含まずに、三類本の増補部のみを、宗祇系の序注・切紙の一部ととり合わせた伝本が管見にふれた。やや興味を惹かれるので三類本諸本の解題に続け付説する。

次に全体を四類に分類した際の指標を簡単に叙べておこう。

第一に、冒頭、「古今灌頂作法」と仮題を付す、伝授の場における師資の行うべき挙措を記した一項の有無・差違である。分類後の呼称でいう第一類本・第二類本として表に区分された諸本は、用字・字句に小異はあるがこれを有し、それ以外はもたない。

第二に、それに続く伝授目録に関する相違である。その有無、項目数・題名の差違が諸本に存在する。別記細目に記した通り、目録があり、十項目を記すのは区分後の呼称でいう第一類本である。次に目録があり、七項目を記すのは第二類本である。一・二類本の目録には題名にも少異がある。目録を持たないのがそれ以外の諸本である。

ところで第一類本・第二類本には、活字翻刻がないことは無論のこと、この冒頭部分に関しては、前掲三輪氏の論にも引用

がない。そこでやや冗長にはなるけれども、指標の第三の説明に入る前に、「古今灌頂作法」を第一類神宮A本より引用し、続く目録は後記細目にも付記する通りではあるが、神宮A本と第二類静嘉堂本から、併せ示しておくのが便宜であろう。

抑和調之道余者志人者必先哲之跡於真那部ノ可シ而ニ作法アリ是於灌頂与可名付此灌ノ頂於撰与思ハン授者ハ先ツ清所ヲ示シ精進ノ為潔齊諸ノ哥仙於安置シ多伝末津蓮花ノ於作懺悔香ヲ焼莊嚴美ヲ調ヘヨ其時ノ師先道場ヘ入テ事之由ヲ啓白ノ立テノ第子ヲ呼可畏テ入手師之左ニ座セヨノ師三礼ノ本座ニ着ス次竊ニ三首ノ本調ノ於セト云(朱)示ト云イ本八雲難波若ク仍哥ヲ詠ンテ三遍之後ノ第子之頭ヘニ花ヲソ、ケ其時第子三遍礼ノ。(朱)後イ  
ノ即席ニ上テ三首ノ本哥ヲ詠スヘン各三度ノ師第ニ私ノ哥ヲ呼第子始ハ式題セヨノ次ニ哥ヲ取出シテ膝ヲ着テ指上ヨ師是ヲノ取テ詠スヘン

(以下の五行衍文か、二類本になし。声点は朱) 次和調之仙受ケ性于天<sup>ノ</sup>其才卓余<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>銚ノ森然<sup>ノ</sup>

三十一字詞華露鮮 四百余歳来葉風伝斯ノ道宗匠我朝前賢  
湿<sup>シ</sup>而無<sup>ク</sup>三鑽<sup>ノ</sup>之弥堅ノ鳳毛少<sup>ク</sup> 麟角猶專<sup>ナリ</sup>既謂独歩  
誰敢比<sup>ハ</sup>肩<sup>ヲ</sup>

師席於下テ三首ノ本調ヲ三遍可詠之其後ノ第子席ヨリ下リテ師向テ三礼ヲノ膝ヲ着テ灌頂之作法ヲコフヘン此時受テ謂ク此ノ灌頂ハ是和哥之深義也聊余不可為トテ此卷ノヲ三度ヒタヒニ当ヨ即是於得テ一々之事於ノ習フヘン先名許ヲ授ク可也  
一大和調二六義六ノ体三三曲四五句ノ五名体五日戸丸次第六言実体ノ七五輪五仏和哥同体八父母二調九三鳥三無十ノ一松一草可受之迷前ニハ綺言□語之罪ニナシ悟ノノ前ニハ法喜禪喜ノアチワヒ成ル者也(各項目右肩に朱合点、省略)

神宮A本はこの次行より「一大和調ト者……」と目録の第一項に見合う本文へと移る。以上は第二類静嘉堂本にもあり、字句に多少の差がある他、目録に関しては静嘉堂本では、まず前行との行間に朱で「目六」と注して、続いて次のように記す。

(印朱、以下同)  
一ニハ大和調秘伝。二ニハ三曲ノ不思議。三ニハ六義風納。  
四ニハ四人々丸次第。五ニハ二首人体。六ニハ五句五輪。  
七ニハ和調ノ修徳性徳ノ之次第(各項目右肩に朱合点、省略)  
そして同じ行から「抑大和調ヨムニ読様有……」と目録の第一項に見合う本文へ続いている。

次に指標の第三に、所収内容・その並びの差違である。第一類本は目録に合わせ、「大和調」カの一項より始め、途中前記

のように多少混沌とするが、総じては目録の諸項の大部分に見合う内容に触れているようである。但、第九項「三鳥三無」第十項「一松一草」は省略するか。第二類本も目録に合わせ、「大和調秘伝」から始め、順を追いつつ進める。区分もかなり明確なようだが、第一類本と比較し、単純化も目立ち、脱落もあるらしい。第五項「二首人体」第七項「和調修徳性徳之次第」は本文としては全く含まず、第六項「五句五輪」も一部のみを示すにすぎないようである。最後に「古今著聞集」から「夢人丸事」として短い引用がある。なお第二類第二系本はその引用を短く切りつめ、それに続け最後に「ほのく歌の事」として他本にない一項が付加されている。第三類本は「三曲之不思議」より始まり、二類本にはある「四人々丸次第」はないものの、一方二類本に欠ける「若く仍調之実義図」（例の立河流の胎内五位図とほぼ同一のもので、二類本の目録でいう「和調修徳性徳之次第」か）、「赤人出現事」を、第一類本と共に有している。第四類本は第三類本を簡略化、更に重要部分を悉く捨てている。

指標の第四に、伝承的奥書の有無・差違である。細目に付記するように、分類後の呼称でいう第一類本・第二類第二系本・

第三類本にはそれが有り、第二類第一系本・第四類本にはない。第一類本では藤原為顕を經由するらしいことが知られる奥書であり、第二類第二系本では後人の付加の可能性も大いにあるが六条家等を經由することが主張され、第三類本では藤原為助（相）の記名を持つ奥書が記されている。要点のみ示せば次のようである。

神宮A本、第18項尾に、

又云(一三〇六)

徳治元年初秋天 桑門明覚判

「明覚」即ち為顕の法号である。同本には続いて「古今相承血脉譜」があり、為顕の子為清が相伝者の最後に記される。

第二類第二系書陵部A本、尾題「灌頂卷早」の後に和歌の神、祖師として住吉・玉津島から赤人までをあげ、連続して、

関白道長／ 宇治関白長家 二位家隆／ 后宮大夫顕輔 九

条二位行家／ 幸満丸

と次いでいる。但、他の奥書（例えば「和歌灌頂次第秘密抄」あたり）の使い回しの可能性も残ることは後記する通りである。

第三類本では諸本にすこしの異同はあるものの「赤人出現事」の次に伝為助の奥書がある。年記と名を示す。大東急本に



と。

指標の第五に、「古今灌頂」とは本来は区別すべきであったろう諸項の付加の有無・付加された諸項の差違である。分類後の区分でいう第三類本・第四類本にはそれが、第四類本は、第三類本を更に増補する。このことについては前書きで言及した通り。また第三類第二系本には、冒頭部に「玉伝深秘卷」に一部重複する秘説を数項加えている。細目に1から5まで初めの一文乃至仮題を以て示した数項である。

第六に、巻立ての有無・差違である。三巻に分けるのが第一類、二巻に分けるのが第三類第二系本である。第一類神宮A本は、はじめにのべたように、現在の形態は口授者によってか草子集成のようなものが一度咀嚼され、つきまぜて語られて以来、三巻に仕立てられているらしい。一方第三類第二系本の乾巻は、冒頭、数項の付加があるとはいえ「古今灌頂」の部分まで、坤巻は増補部である。第一系本を後に分割して二巻としたらしく思われる。これにつき内閣本の書誌事項をしるす際に少々の言及がある。以上三種の伝本以外の諸本には巻立てがない。

さて、説明が錯綜したので、これら六視点に依りつつ諸本を四分類した後の、各級の呈している形態上の特徴を、ごく簡潔に纏め直しておく。第一類本は、「古今灌頂作法」と目録を有し、最も詳しく、藤原為頭の名が見える。第二類本は「古今灌頂作法」と目録を有し、やや簡略、重要な項目・奥書が抜けている。第三類本は「古今灌頂作法」・目録、ともになく、やや簡略、二類本に比し、重要な項目が脱するが、しかし二類本にない、一類本と共通する重要な項がある。為助の奥書を有し、後半部に、大量の増補がある。第四類本は作法・目録・奥書ともになく、すこぶる簡略、後半部にも一項をおとす反面で、三類本の増補に加え更に増補がある。

そうしてこの順に準じて各類は次第に成立していったものと考えられる。その証としては即ち、第一類本が「古今灌頂」に関する限り網羅的かつ最も詳細であり、第二類本は第一類本の断章的形態を提示し、第三類本は第二類本に含まない項も存するものの、第二類本に行文上類似性がありながら冒頭部に重要な欠落や他の項目とのとり合わせが生じており、そして第四類本は簡略化が進行する一方、更に他の項目の増加を生じ想定される原形より最も離れている。勿論以上は、一類本が直接に摘

句抜粹されて二類本を生み、二類本が直接に三類本を生み、ということの意味しない。より多くの曲折があったであろうことは、一類本に比す時、二・三類本が行文上簡略で、類似しながらも、各々相違した欠落項目を有する一点からも推測がつく。

つまり、一類本類似の原形より、まず一旦その簡略本が成立し、数項が落ちて二類本となり、或は一類本より簡略な原形があつてまず一類本として複雑化し一方では数項が落ちて二類本となり、以上二つの場合のいずれかに、これと並んで別の項の落ちた一本に、更に尾に大量の増補が加わつて三類本となり、といったいろいろんだ経緯を想定しないことには、こうした事態の説明がつかないからである。ただ、現存伝本からその経緯の詳細を再構成することは非常に困難であらう。

次に所見する諸本の書誌的概要を摘記する。内題による標示を省き、全体を「古今灌頂」の総題のもとに一括し、所蔵者・写年・書写者・大きさ・冊数の順で諸本の大凡を示した後、やや詳細に形態的事項を付記するのは、前稿と同一である。また梵字は全てその「音」のみを（ ）内に示した。

## 第一類

神宮文庫蔵A本(神宮A本)

〔江戸中期〕写 一帖

浅葱色空押雷文繫菊文様表紙(二四・四×一七・〇cm)。外題、

左肩布目地雲母刷雷文繫菊文様題簽本文別筆「和歌古今灌頂卷

上中下 全」<sup>(朱)</sup>。本文の料紙に薄様を用い、装丁はまず袋状に二ツ

折にし、更に四ツ折にして数紙を綴った、変形の綴葉装。内題

「古今灌頂上巻」「古今灌頂巻中」「和歌灌頂下巻」。三巻仕立

てだが書名に一貫性を欠くようである。この三種の内題を集字

点綴すると丁度外題になる。臆測だが恐く外題は、本来的なも

のではあるまい。毎半葉七行。字面高さ約一九・一cm。五折、

墨付五十丁。全体は片仮名交りを用い、片仮名の振仮名、朱系

線・合点・声点、本文同時の朱校・書入れ等がある。各巻の尾

に、伝定家識語が、また巻下には明覚(為顯)と伝える識語・

血脉——後記細目に付記した——等がしるされ、同じく各巻尾

に続けて「和阿」(未詳)による、三種ともほぼ全く同文の、

文和二年(一一三三)の識語が記されている。更に巻下には和

阿奥書に次ぎ、追記項目を隔てて、他に二種の本奥書がある。

巻下から和阿以下の奥書を示すと次の通りである。

古今文字読烏菟菊蘭并<sup>灌頂</sup>血脉授之給早於彼/秘抄者不可出他家

雖然依有師第之契／約（奉授）于僧嚴專者也凡此秘抄者縱雖  
為子／孫非器量不可授之志深重器量仁出来者一人／可授之此  
旨一塵不可背穴賢<sup>々</sup>、可秘<sup>々</sup>而已

文和貳年九月 和阿

（ ）内は脱字か、卷上・中の同文から補った。これに読き二  
丁分の補記項目があり、次で、

永徳元年九月十日 実玄菴

さらに、

右者一乗院殿実玄真翰令／書写者也

明暦三丁酉孟夏日

と記している。永徳元年（一一三一）明暦三（一六五七）の兩  
奥書とも本奥書である。実玄庵を明暦の奥書では、近衛経忠の  
男、興福寺一乗院主の実玄と見ている。

すでに記したように、巻頭近くに伝授目録を有するが、その  
目録通りの内容の諸項が配されているかどうか、正確なところ  
は明らかでない。また誤脱錯簡が全くないかどうか不明らか  
ではない。

全体は柿本人麻呂に関する秘説が中心である。冒頭部は、三  
輪氏の指摘通り、「玉伝深秘卷」所収の「金玉双義」篇に重なる

点が多く、血脉にも「為頭」の名を見出すから、掲出本の祖  
本が為頭流の中から出現したことは確かかといってよからう。

印記「林崎／文庫」「林崎文庫」「牘庫」（二丁表）。牘庫は  
内藤風虎。「天明四年甲辰八月吉旦奉納／皇太神宮林崎文庫以  
期不朽／京都勤思堂村井古巖敬義拜」（末丁裏）。

目録記載書名「和歌古今灌頂卷」（3323）

## 第二類 第一系

静嘉堂文庫蔵本（静嘉堂本）

〔室町前期〕写 一帖

後補山吹色地雲龍文様金銀繡裂表紙（二一・三×一三・一  
cm）。外題、左肩後補楮紙題簽「古今和歌灌頂卷」。装丁、綴葉  
装。見返、金銀切箔芒箔散金銀砂子金銀泥霞型文様斐紙。巻頭に  
「古今灌頂卷」、題号の下に朱筆で「不住人丸之作」と。料紙、  
厚手楮紙。每半葉七行、注小字双行。字面高さ約一九・〇cm。  
四折、墨付十五丁、遊紙前後各一葉。全体に片仮名交りで記さ  
れ、万葉仮名風の漢字表記も多見されるほかに、助辞を細記す  
る宣命書きの特徴を示す。本文同時の朱合点・朱繫線・朱傍書  
等あり。添付される畠山牛庵と古筆了仲の極めでは後崇光院筆

と認定している。自筆本「看聞御記」の書影と比較する限り、確かに近似しているようであり、料紙も重厚であるから、その可能性もあろうけれども断定には到らない。なお掲出本の現状は改装時にか錯簡が生じて、容易に正し得るものの意の通らないところがある。原態はおそらく二折であったが、第一折五枚（初一丁表紙裏、次一丁遊紙）・第二折四枚のところ、各折の内側二枚ずつが離脱し、現在第一折の次に第二折、第三折として綴じられている。従って現状は次のような形態下にある。

### 第一折

1 「古今灌頂作法」の過半（墨付一オウウ）。

5 「大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之大」の殆ど

（二オウ四ウ）

### 第二折

1 の残り五行

〔伝授目録〕

2 「大和調秘伝」

3 「三曲不思議」

4 「六義風納」（五オウ八ウ）

### 第三折

7 「諸ノ野調・三ノ説〔ある事〕」の最初の三行を除く全て

8 「五句五輪」

9 「夢人丸事」の末尾二行を除く全て（九オウ十二ウ）

### 第四折

5 の残り三行

6 「四人々丸」

7 の冒頭三行（十三オウ十四ウ）

9 の末尾二行（十五オウ）

正しく読むには要するに、一丁裏より五丁表へ飛び、続けて八丁裏まで読んだ後、二丁表へ戻り、四丁裏まで読んで十三丁表へ移り、十四丁裏から九丁表に戻って十二丁裏まで読み、十五丁表の二行に続けなければならない。

次掲天理A本は、掲出本の臨写本と思しいが、こうした混乱がなく、通意に不便がない。書写時に正したか、または錯簡を生ずる以前に書写したかのいずれかであろう。

奥書は次の通り。

応永廿年五月九日書写之依為／急本馳惡筆訖旁以不可有他見

者也

此本自法隆寺出云／秘藏ト（花押）

「此本」以下は本文と別筆、牛庵・了仲は一条冬良筆と認定。

「和詞灌頂次第秘密抄」「幽旨」とともに同時に書写され三冊一具の体裁。加えて飛鳥井雅章の大沢右京大夫宛書状、雅章筆の三冊への外題、畠山牛庵添状（延宝七）古筆了仲折紙（元禄八）を添付し、二重の箱に納める。

目録記載書名「古今和歌灌頂卷」（1055）

天理大学附属天理図書館蔵本（天理A本）

元治二年（一八六四）在月庵写 中一冊

原本未見、斯道文庫蔵の書誌カードと紙焼き写真によって記述する。

掲出本は静嘉堂文庫蔵本の忠実な写しである。同じく「和詞灌頂次第秘密抄」「幽旨」と合せ、三冊で一具となっており、「和詞灌頂次第秘密抄」の尾に、静嘉堂本に添付する、飛鳥井雅章の書翰が写され、同様に雅章の外題・畠山牛庵添状がある旨の注記、古筆了仲極状の写し、書写奥書が続けて記されている。

今課題とする「古今灌頂卷」冊は、縹色正繫文様裂表紙（二〇・三×一五・一cm）。外題、左肩金紙題簽「古今灌頂卷」。装

丁、袋綴。遊紙、前後各一葉。内題「古今灌頂卷」。下に続けて

「不住人丸之作」と。料紙、楮紙。毎半葉七行、注小字双行。

字面高さ約一八・〇cm。墨付、全十五丁。片仮名交りを以て記され、助辞を細記する。本文同時の朱合点・朱繫線・朱傍書等は、依拠本のままを写したものの。本奥書は、

応永廿年五月九日書写之依為／急本馳惡筆訖旁以不可有他見者也

此本自法隆寺出云秘蔵く（花押）

と。書写奥書は本冊になく、「和詞灌頂次第秘密抄」の末尾にある。次の通りである。

元治二年二月写之 在月庵（花押）

在月庵は未詳。

錯簡があると思しい静嘉堂本に依りながらも掲出本には正されている。

印記はないが各冊に「鈴木佐兵衛所持」の墨書がある（但、本冊のみ「所持」字なし）。

目録記載書名「古今灌頂卷」（911.299）。

曼殊院蔵A本（曼殊院A本）

掲出本は原本未見、近時刊行の『曼殊院蔵古今伝授資料第二巻』

鷹司家旧蔵本

所収本文と同解題によりつつ大要のみ記すこととする。

掲出本は「古今灌頂之巻」と「古今集極秘之大事」との合写

渋茶色表紙（一九・六×一四・一cm）。外題、左肩題簽「古今

本である。後書の途中より筆が変わるが同時期の書写と認めて

灌頂」（本文と別筆カ）。装丁、袋綴。裏打修補あり。遊紙、後

よかるう。

三葉。内題「古今灌頂卷不住人丸作」。每半葉六行、注小字双行。

鶯色地金色刷毛目表紙（二五・五×一七・七cm）。外題、左肩

墨付十七丁。全体は片仮名交りを用い、助辞を細記するがあまり

打付書「古今秘事」。装丁、綴葉装。冒頭「古今灌頂之巻」。料

り敵密ではない。返点・送仮名等も散見される。朱の合点・繫

紙、斐楮交漉紙。每半葉十行、注小字双行。字面高さ約二一・

線・圈点等がある。

二cm。五折。遊紙、前書後書の間中に六葉、後三葉。墨付、三

奥書はない。

十四丁、内今課題とする前書十四丁。全体に平仮名交りで記さ

静嘉堂本と比較するに、直接的書写関係にはなさそうであ

れる。尾題「灌頂之巻早」に続け、別記の細目に付記した伝承

る。たとえば、静嘉堂本は本文にも万葉仮名風の表記が多見さ

的な奥書の他、次のような二条宗祇流の血脉、本奥書が認めら

れるが、掲出本には全く用いないなど、用字上の差が存在して

れている。

いる。ただし、こうした書写上の形式面での差はあるものの、

定家 為家 為世 頼阿 / 経賢 堯尋 幸孝 常縁 /

本文内容には殆ど差がないといってよかるう。錯簡はなく天理

宗祇 / 基綱 / 尚政 / 神部大蔵大輔 / 惣社宮

A本と同一の順序である。

内少輔

万治三庚 子年六月十六日 自宗判

第二類 第二系

長谷川重全丈

宮内庁書陵部蔵A本（書陵部A本）

前と続けて読む時、やや不審の念も生ずる奥書である。細目付

記の奥書は、二条家正嫡とはむしろ對抗する勢力の遠祖の列挙のように見える。一方この奥書は、二条家の正嫡から宗祇、その末流への流れを示す。臆測にすぎないが後の血脉等は本書の本来的な奥書というよりも、「惣社宮内少輔」の主な学脉系譜を記したにすぎぬのではなからうか。宗祇が本書のごとき古い非合理的な説に全然無関係であったとは思われない証拠は、「兩度聞書」の中にすらあるけれども、本書が定家・為家らを経由しているとは全く考えにくい。いつしか本書が宗祇流末流の人々にも用いられていたことだけは確かであろうが疑問の残る奥書である。

さて後書にも細目付記の伝承的奥書の外に本奥書がある。

右者三井寺靈鷲院日光前大僧正静賢／雖為御秘本永正元<sub>甲</sub>年卯月廿九日故あ／りて浅間社頭奉納之所也不出之靈宝たりといへとも／紀伊大樹源頼宣卿被及聞召被成下／芳命殊由緒之好るといひ旁難辞古今神／道之灌頂并一木三嶋五議三体和歌之秘／奥伝受早誠一國一人之為伝受儀許容申／候上者真実之芳志第一候尤我等在世之／内相伝候事可有遠慮候死後者其器量次／第系伝相統之為ニ候間其心得肝要候若／未練之心出来候者忽三神之冥罰可被罷／蒙者也

万治三<sub>庚</sub>年六月十六日

惣社宮内少輔判

右惣社司農より相伝之卷物等誰に／か可伝と年来其人の志之玄を求浅きを余所になしたためらひける処に適く玄信／ある気機を見付其器量又他にことなれ／はかゝる幸是誠に仏の五時なるへしと師／第の芳盟を結縁の灌頂をさつけ和哥神／秘等授早努くおろそかに思ふへからす毎／朝三首之本歌を詠し給はし現か世にてハ／其□難を遁来世にては上品上生之運／台に至り給はん事必せり則予墨翰／を染讓之者也聊不可有他見者也

右六卷者一無軒道治法橋／惣社宮内より相伝之書也／然に我等法橋と親屬たる／故伝受了

宝永元年<sub>甲</sub>申載四月吉辰

撰州勝浦村散人木鐸道人／宗運写之于時七拾三歳也／付与舎第宗巴伝無窮者也

以上の相伝の経過を纏めると、静賢から永正元年（一五〇四）浅間社へ奉納、以後当社に相伝され、徳川頼宣にも披露したものを、万治三年（一六六〇）という年、惣社宮内少輔自宗が、一無軒道治に相伝、続いて撰州勝浦村の宗運がそれを宝永元年

(一七〇四)に書写、宗運は舎第宗巴へ付与した、ということになるか。宗運書写本を依拠本として、少くとも当該後書は書写されたものと考えられる。前後二書は「惣社宮内少輔」の次位の相伝者が異なっているが、最後の段階でとり合わせられたか。仮にそうだとすると後書末尾の奥書は後書のみ奥書でなければならぬ。静賢の付与する秘説「古今神道之灌頂」即ち「古今灌頂」とそれそうでもあるが。不審なのは「惣社宮内少輔」の、ここに引用した前後の二奥書とほぼ同旨の奥書を有する、「和歌灌頂次第秘密抄」と「古今集極秘之大事」とのやはり合写本(書陵部蔵「古今秘伝」鷹250)もあることで、奥書が一部使い回されているのか、などありがちなことだけに、大いに疑われる。また前書奥書の「惣社宮内少輔」「長谷川重全」の名が、初雁文庫蔵「古今集極秘之大事」(12159)奥書に見えている。つまり、右記の「右者三井寺……」から万治の年記、記名までが殆ど同一で、最後に「長谷川重全文」と宛名を書いてある伝本がある。いりくんだ経緯がありそうなので別の資料を交え、後考を期することとしよう。

一無軒道治は正しくは道治、生没未詳、地誌「蘆分船」「住吉相生物語」「高野山通念集」「難波鑑」等の著があり、もと

紀州公に仕えた(日本古典文学大辞典)。他の相伝者は未勘。

さて、当二系本「古今灌頂之巻」の最大の特徴は一系本にな  
い一項、かなり長い「ほのく、歌の事」が付くことである。内  
容はこの歌と伝弘法大師作「いろは歌」と、所謂天台五時教判  
等を結びつけた解釈で、第七項に近似するが、一類本はじめ他  
類の諸本にも同文はない。

印記「鷹司城南／館図書印」(見返)

目録記載書名「古今秘事」(266 243)

### 第三類 第一系

大東急記念文庫蔵本(大東急本)

〔室町後期〕写 大一冊

新補標色表紙(二六・九×二〇・二cm)。外題、左肩題簽「古  
今集灌頂古写本」。装丁、袋綴。全巻裏打修補を施す。冒頭の題は  
「古今和〔調〕集灌頂」。料紙、楮紙。每半葉十、十一行、注小  
字双行。字面高さ約二二・六cm。墨付三十五丁。全体は片仮名  
交りで記され、助辞を細記する宣命書きの特徴が明らかであ  
る。朱は全くない。六丁表には本文が八行で、空白部に「御先  
代御筆類」の別筆付箋を貼付する。尾題「古今和歌集灌頂巻一



「卷」(末丁裏)、一行空白のち次の識語がある。

右古今灌頂雖千金万金不可伝人也／若可有粗忽之伝之、神罰其恐可多也／可秘々／哥道之趣不可過之／穴賢々

ここでは、筆者のいう増補部分を含め全巻を「古今灌頂」と呼称しているようである。成り立ちからいえば、誤称と考へるが、冒頭が全巻の内容を最もよく表すのは多くの場合普通のことだから、いつしかそう呼ばれるようになったとしても不思議ではない。説明の順が逆になったが冒頭以下の、筆者が「古今灌頂」と呼ぶ主要部にはその尾に、別記した伝為助の奥書がある。真偽不明、しかし三輪氏もいわれるように、三類本は冷泉流に用いられたものとはいい得ようか。

前記するように「古今灌頂」の部に、以下の三類諸本ともども、一類本にあり二類本にない「若々仍謂之実義図」「明仁出現事」の二項を持つ他、「明仁出現事」は一類本よりも詳しい。三類本前半部「龜言及軟語皆帰第一義ト云」(後述活字本一七五頁)までが、一類本の全文に相当している。

活字翻刻がなされている(古典文庫99『中世神仏説話』所収)。また『大東急記念文庫貴重書解題』にも言及がある。

目録記載書名「古今和歌集灌頂」(418・13001)

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本(斯道本)

永禄十一年(一五六八)愛染院写 大一冊

縹色表紙(二五・九×二一・八cm)。表紙のみ表裏共裏打修補を施す。装丁、袋綴。外題、左肩後補題簽「古今和歌灌頂」。遊紙、後一葉。冒頭の小題「古今和歌灌頂卷」。料紙、斐楮交漉紙。每半葉十一、二行、注小字双行。字面高さ約二一・五cm。墨付全二十八丁。朱引、朱合点あり。「古今和歌灌頂卷」の胎内五位図にも朱を用いる。巻頭以下、「保野々哥、兩説アリ」と記すところ迄は片仮名交りを用いるが、それ以下は主に平仮名交りとする。

別記した伝為助の本奥書(「古今和歌灌頂卷」の末尾)以外に次の書写奥書がある。

永禄十一年<sup>辰</sup>菊月廿三日愛染院六十二才而書之

印記、遊紙に不明墨印(更にその上に不明花押)(09130)

天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵本(天理B本)

〔江戸前期〕写 大一冊

享保二十年(一七三五)卜部(吉田)〔兼雄〕加証奥書

淡茶色表紙(二七・八×二〇・二cm)。外題、左肩別筆打付書

「古今和謠灌頂卷」。装丁、袋綴。冒頭の小題「古今和歌灌頂卷」。料紙、斐楮交漉紙。本文行数、每半葉八行。字面高さ約二四・五cm。墨付全四十丁。朱合点・返点・句点・声点・濁点を付す。全体に片仮名交りを以て記され、助辞を細記する宣命書き風の趣きを残す。

別記細目に引く伝為助の本奥書の他、巻末に下部兼雄の加える後補奥書が存する。

右歌道之秘本也敢莫出問外矣

(一七三五)  
享保廿年秋七月日

遂一見畢

拾遺下部(花押)

墨付四十枚

下部(吉田)兼雄は宝永二年(一七〇五)生、正二位神祇権大副、天明七年(一七八七)薨。

印記「□□(二字切取)〔蔵〕書」「吉田文庫」(一丁表)

目録記載書名「古今和歌灌頂卷」(吉田八一一三〇)

国文学研究資料館初雁文庫蔵A本(初雁A本)

天保三年(一八三二)大平忠叔写 半一冊

淡縹色表紙(二三・二×一六・三cm)。外題、中央書題簽「古

今和歌灌頂卷藤原為助卿。冒頭の小題は「序 藤原為助卿 秘

書」。装丁、袋綴。料紙、楮紙。行数、每半葉十一行、注小字双

行。字面約二〇・一cm。墨付全三十四丁。全体は時に片仮名を

交えながら主として平仮名交りで書かれるが冒頭より「大日摩

訶……」までは全文片仮名交り。振仮名は濁点をも伴う片仮名

を用い、全体に比較的丁寧に施される。同じく片仮名の送仮

名・返点等あり。胎内五位図に朱。本書の特徴は別記細目に明

らかなように、全体の配列が他本と相違し、先ず他本の巻尾

の、古今仮名序に関する数項を巻頭に移していることである。

以下の順には変化がない。全体の構成に不審を覚えた後人乃至

書写者の加える改編であろう。伝承的な奥書は細目に記した通

りで、それとともに、巻尾には次の書写奥書を有する。

天保三壬辰年中夏大平忠叔写

大平忠叔は未詳である。

『初雁文庫主要書目解題』(昭和五十六年)に解題。

印記「子誠之」(一丁表)「忠叔之印」「字曰子誠」(上陰

刻、下陽刻、奥書の記名の左傍)

目録記載書名「古今和歌灌頂卷」(12・118)

宮内庁書陵部蔵B本（書陵部B本）

〔江戸後期〕写 大一冊

鷹司家旧蔵本

茶色刷毛目表紙（二八・四×二〇・八cm）。外題、左肩別筆打

付書「古今和調灌頂卷」。装丁、袋綴。冒頭の小題「古今和調灌頂

卷」。料紙、薄手斐楮交漉紙。每半葉十五、六行内外不等。字

面高さ約二四・八cm。墨付全二十三丁。冒頭より「赤人出現事」

迄は片仮名交りを主体とし、「古今和歌秘伝曲文 父母大事」

以下は平仮名交りを主体とする。全体に書写態度はやや粗雑で

判読に苦しむ場合も少くない。この種の伝書の内容が江戸期、

特に江戸後期以降の書写者らに受け入れ難くなっていること

が、疎略な態度をうむ理由の一つと考えられる。

「赤人出現事」の尾に、別記細目に記す「為助」の奥書があり、

他本の多くとちがって巻尾にも同様別記した「為助」の奥書が

存するのは大きな特徴である。不審。それに次で巻尾には、

是をうつし見るニ所々字ツ、キ句キリ其外ノ字チカイ色々多

く見合よみ合なおしノヲクヘキ也

幽齋玄旨ノ書御相伝とハ殊外ノチカイアリ是モあるヘキ書

とも也以上終

の如く、江戸初期以降、おそらくは該本書写者カの奥書も付加  
されている。

印記「鷹司ノ蔵書記」（二丁表）「宮内省ノ図書印」（同）

目録記載書名「古今和歌灌頂卷」（二六六・三九二）

宮内庁書陵部蔵C本（書陵部C本）

〔嘉永四年（一八五二）堤（藤原）哲長写 中一冊

〔同年 鷹司政通〕自筆奥書 徳大寺家蔵本の写し

茶色刷毛目表紙（二一・三×一三・六cm）。外題、左肩打付書

「古今<sup>秘</sup>伝授 全」。装丁、袋綴。遊紙、前二葉、「古今和調灌

頂卷」の前に三葉、後一葉。冒頭の小題「古今和調秘伝曲文

母之大事」。通常の配列では「古今和調灌頂卷」が首に配される

はずだが、該本には細目に記すようにそれが尾に配置されてい

る。通常の配列とこの配列とのいずれが古い形態なのかは確と

断定は出来ないが、推定されるなり立ちからいえば、他の同類

の諸本の配列が本来で、掲出本は何らかの考えで「古今灌頂」

の部分の奥にまわしたのであろう。料紙、楮紙。本文行数、毎

半葉八行、注小字双行。字面高さ約一八・二cm。歌に朱合点・

朱△符を付す。ままた朱引も有り。また「古今和調灌頂卷」の胎

内五位図に赤銅色の彩色を施す。本文はほぼ平仮名交りを以て記され、「古今和歌灌頂卷」の冒頭の一項のみを、稀に片仮名を交えた漢字表記とする。

細目所載の為相仮託カの本奥書以外に、それに続け、鷹司政通による奥書が存する。

此古今伝授為二卷有徳大寺家蔵而其説／真言秘密解釈也和哥者真言之法者空海入唐／伝法濟我朝也不審不有無而 靈元上皇／依勅奉之之由家伝進便写之<sup>云</sup>、仍今／年命哲長朝臣写之<sup>早</sup>

辛亥九月 (花押)

哲長朝臣は甘露寺庶流、堤哲長か。文政十年生、嘉永四年は廿五歳、文久元年三十五歳で非参議従三位(公卿補任)。

印記「城南／館印」(一丁表)、「鷹司城南／館図書印」(後

遊紙中央)、「宮内省／図書印」(一丁表)

目録記載書名「古今伝授」(鷹 四八二)

宮内庁書陵部蔵D本(書陵部D本)

〔江戸末〕写 大一冊

鷹司家旧蔵本

灰色表紙(二九・六×二〇・八cm)。外題、別筆打付書「古今和歌灌頂卷 全」。装丁、袋綴。遊紙、後一葉。冒頭の小題「古今和歌灌頂卷」。料紙、楮紙。每半葉九行。字面高さ約二二・一cm。墨付全十六丁。全体に片仮名交りで記される本文は、細目に別記する通り「赤人出現事」「為助」奥書迄、他本の前半部に相当する。巻尾には次のような本奥書カを記す。

這一冊校合之事

法皇被仰下遂読合了。雖然於／所々有難信用事等尤不足／見者也借早筆令書写助／筆了／

(花押)

法皇・花押の主、ともに不明。後者は鷹司政通ではなさそうである。ともあれ、増補部を含まない、同類他本の前半部に相当する本書の如き伝本が、一方でこの形態下にいつしか流伝していたことを推測させる奥書である。

印記「鷹司城南／館図書印」(一丁表)、「宮内省／図書印」

(二丁表)

目録記載書名「古今和歌灌頂卷」(鷹 三九五)

香川大学付属図書館神原文庫蔵本(香大本)

写 一冊

該本は原本未見、国文学研究資料館所蔵のマイクロ・フィルムによって大要を記す。麻葉文様表紙。外題、中央題簽「古今集灌頂 完」。裝丁、袋綴。遊紙、前後一葉か。冒頭題は「古今和調集灌頂」。每半葉十行、注小字双行。墨付三十五丁。本文は片仮名交りを用いる。尾題「古今和歌集灌頂卷終」。本稿で筆者が三類本は冒頭部のみが「古今灌頂」であろうと推定したのに反する尾題である。後人の追補か。次いで、

右古今灌頂雖千金万金不可伝人也若可有そ忽／之伝者ハ神罰其恐可多也可秘々哥道之趣不可／過之穴賢と。細目に付記した伝為助の奥書と主旨は似ている。記名が落ちたものとも一応疑えるが後人のものと見る。

『神原文庫分類目録』に「室町末」写とする。  
目録記載書名「古今和歌集灌頂卷」(911.1351)

九州大学附属図書館細川文庫蔵本(細川本)

写 一冊

該本は原本未見、斯道支庫所蔵の書誌カードならびに紙焼写真によって大要のみを記す。水辺草花文様表紙(二七・八×二〇・七cm)。外題、左肩切箔散題簽「古今灌頂卷」。冒頭「古今灌

頂之卷」。每半葉九行、注小字双行。墨付全四十八丁。全体は平仮名交りで記される他、濁点や、丁寧に平仮名で振仮名が付されている。「古今灌頂」の奥書に「為助」とあるべきところ、

掲出本のみ「為兼」と認めるのは不審。しかしここから特別の意味を読みとるのは如何か。諸本の状況から見て転写過程での誤写の可能性の方が大きいであろう。巻尾に「右古今灌頂卷并 日本記秘歌也可秘」、続けて「我覚本不生(ア) 地ぢ／出過語言道 (ビ) 水すい／諸過得解脱(ラ) 火くわ／遠離於因縁 (ウン) 風ふう／智空等虚空 (ケン) 空くう」と記すのは他本にない特徴である。

細目に記した伝承的奥書以外に本奥書書写奥書等はない。  
(506543コ24)

### 第三類 第二系

国立公文書館内閣文庫蔵本(内閣本)

万治二年(一六五九)源仲孝等写 大一冊

黄色地空押艶出花并唐草等文様表紙(二六・八×一九・四cm)。鹿の如き動物や足付きの台に盛った果物らしきものなどを配する盛り沢山の文様である。外題、左肩本文別筆打付書「古

今秘伝抄」装丁、袋綴。内題「古今秘伝抄(坤)」。乾坤二巻仕立てになつてゐるのは大きな特徴である。冒頭の数項を經、十二丁より「古今和調灌頂卷」へと続く。料紙、薄手楮紙。每半葉八行、注小字双行。字面高さ約二一・九cm。墨付全六十五丁。乾巻後半より筆が変わり、坤巻後半で二変する。計三筆と思しい。後出万治の奥書は前半の筆と同一か。全体は片仮名交りをして記され、冒頭の増補部十一丁(「古今和調灌頂卷」の前まで)には、返点・堅点・送仮名・振仮名がきわめて丁寧に付されてゐる。一方「古今和調灌頂卷」より後は、異校・振仮名・堅点等が散点する程度。尾題「古今秘伝抄(坤終)」。乾巻は冒頭より二十八丁まで、即ち、増補部に入る前で終る。坤巻の途中「アリシフリ」の前に「古今灌頂ノ巻下」と行間補入するのはやや不審。イ校なのか、以前の巻立ての残存なのか判断に苦しむ。しかし神宮B本・曼殊院B本にも共通してゐる。掲出本には、三類一系本の「古今灌頂卷」の尾(増補部前)にある、伝為助の奥書が、同位置即ち乾巻尾にあるとともに、やや字句を変じて坤巻の尾にもしるされてゐる(後述)。

次に、本奥書としては、まず乾巻尾題の前に、

嫡々相承而相雲州三沢野田藤原朝臣安家

のようであり、坤巻尾の伝為助奥書に次で、

嫡々相承而伝雲州三沢野田藤原朝臣安家

とほぼ同文をしるしやや空白をおいて、その丁の裏に、

文祿三春末花残天乾坤而集漸而／加一見令校合早不可他見物

也

今出川右府判

とする。以上が本奥書である。続いて丁を改め、

季春々日適偷得之藏本招莫逆之数／生全坐隱凡走筆直繕写焉

実以可制外／看而已

万治己亥

三月十一日 朝三大夫源仲孝

と認めて寄合書であることを示してゐる。

まず坤巻の文祿の奥書は、前と続けて、今出川右府より、安家への伝授奥書と解することができよう。次掲の神宮文庫B本では「安家」の次に「江」字が加わり空白をおかずに文祿の奥書に続く。今出川右府は今出川晴季。家号を菊亭と号す。天文八年(一五三九)生、天正十三年(一五八〇)叙任従一位右大臣。元和三年(一六一七)薨。安家は未詳。

書写者源仲孝も未詳だが、三手文庫蔵「柿本人麻呂勘文」

(国文一卯一〇六)の奥書の一部に「万治二年五月既望／朝散太夫源仲孝」とある(川上新一郎氏「顕昭著作考(一)」斯道文庫論集第二十二輯二三三五頁)。

ところで乾坤二巻とするものはこの系の伝本のみである。右記、今出川右府の文祿の奥書に「乾坤而集」のように認めるのは、冒頭に増補し二巻に仕立てたのが、今出川右府であることを示してはいまいか。一系本では増補部の前のみにある伝為助の奥書が、全巻尾にやや形をかえながらも再び記されていることは、元来のものというよりむしろ後人の操作の印象が強い。おそらく、二巻仕立てとするのは、三類本本来の形ではあるまい。ただ掲出本は神宮B本・曼殊院B本と比すと、この系の原態に近いものではあろう。

印記「和学講談所」「浅草文庫」「書籍／館印」「日本／政府／図書」(一丁表)。最後の印は末尾奥書の上にも捺す。

目録記載書名「古今秘伝抄」(20012)

神宮文庫蔵B本(神宮B本)

〔江戸中期〕写 大一冊

藍色表紙(二七・八×一九・九cm)。外題、左肩打曇鳥子題簽

「古今秘伝抄 全」(本文別筆)。装丁、袋綴。内題「古今秘伝抄 乾坤」。料紙、薄手斐楮交漉紙。每半葉十二行内外。字面高さ約二二・三cm。墨付四十四丁。全体は片仮名交りを用いる。

胎内五位図に朱。尾題は乾巻のみに「古今秘伝抄乾」とあって坤巻に欠ける。内閣本と比す時、坤巻末にあるべき古今序に關する注文、それに続く「古今灌頂之卷并日本記秘歌也不可及他見可秘<sup>云々</sup>」の一文、「和哥印信」の一項、尾題までがすっかり脱落しているらしいことが理解される。尾の奥書の残る点から推測して相伝の間の故意の削省であろうか。

奥書は伝承的なもの以外に乾巻尾題の前に、

嫡々相承而相雲州三沢野田藤原朝臣安家

全巻の尾に、

嫡々相承而伝雲州三沢野田藤原朝臣／安家江文祿三春末花残

天乾坤而／集漸而加一見令校合早不可他見物也

とする。内閣本では統いて「今出川右府判」の如く認めているが、掲出本では丁の変わり目でもあるから、いつしか落丁の生じた折にでも脱したかなど想像される。

印記、前出「林崎／文庫」「林崎文庫」「牘庫」(一丁表)。

末丁裏には前出村井古巖の「天明四年云々」の印。

目録記載書名「古今秘抄」(354)

曼殊院蔵B本(曼殊院B本)

写 特大一冊

掲出本は原本未見、『曼殊院蔵古今伝授資料第二巻』所収本文と同解題により大要を記す。

渋茶色表紙(三二・六×二三・三cm)。外題、左肩本文別筆打付書「古今秘抄」。装丁、袋綴。扉題中央「古今秘抄」。内題なし。毎半葉十一行、注小字双行。墨付全三十二丁。全体は片仮名交りをもって記され、助辞を細記する傾向にある。返点・送仮名・振仮名も散見される。ままた合点あり。朱筆はないようであるが、異校や一、二字の勘注が稀にしている。内閣本と比し本文的にはいささかの訛脱がみられる。さらに巻立てなく、内題・尾題もなく、また前項に続けて同行に次項発端を連ねるなど、想像される三類二系本の原態を少しく離れた伝本のように感じられる。

奥書は細目に記した前半「古今灌頂」に対する伝為相のそれに続け、

嫡々相承而伝雲州三沢野田藤原朝臣安家

とのみあり、全巻末尾には何も記さない。

なお、巻立てがないこと、内・尾題がないこと、為助の奥書が中途の一箇所にしかないこと、などは一見一系本と重なる特徴のように見えるが、後の細目に示す通り、冒頭の増補を有することをはじめとして内容的には明らかに二系本に一致しており、一系本とは考えられない。

付説

宮内庁書陵部蔵「古今和歌集大事秘密口伝抄(外題)」

〔江戸末〕和氣信徳写 大一冊

〔慶応三年 鷹司政通〕自筆奥書 〔烏丸(日野)〕光政所持本の写し

本書は前半に三十二丁分の序注を置く。明記はないが諸注と比較するに東常縁講・宗祇録編「古今和歌集両度聞書」の序注部分と認定できる(但、特に前半部・扉・行間・欄上欄脚・付箋に小字を用いた稠密な書き入れ・勘注がある)。また細目に記す自(11)至(15)、(22)「古今集内聞書」共宗祇末流の口伝切紙類からの部分的引用である。

茶色刷毛目表紙(二五・二×一九・一cm)。外題、中央打付書



「古今和歌集大事秘密口伝抄」。序注には内題等なし。後半冒頭の小题「古今和歌秘伝曲文 父母大事」。料紙、薄手斐楮交漉紙。每半葉十一行。字面高さ、序本文二一・二cm、注文二字下げ約一九・八cm。また後半部約二二・二cm。墨付全五十六丁、内後半部二十三丁、書写奥書一丁。序注には前記の通り、僅かに片仮名交りをもまじえる稠密な書き入れがある。主には、「祇注云」として宗祇講・肖柏録「古聞」(を根幹とする何か)を引用し、その後、例えば「淮南子云」「古語拾遺云」などとして、勘注(疏というべきか)を添える。本文と字形が変わらないので、奥書に徴し、本書依拠本に既に存していたと思うが、素姓の明白な古典の博引・諸注併記は室町後期より特に江戸期に行なわれる形態で、古注の、途方もない偽書の盛んな引用(?)とは性格を異にしている。内容的には、契沖以降の国学者の新注こそ混じらないものの、江戸期に加えられたかの印象が濃い。全体を通じ、表記は平仮名交り、一方、比較的丁寧に付す振仮名は濁点を交え全て片仮名を以てしする。

また後半部第四項「古今和歌集大事秘密口伝条々切紙」(大と事とに濁点)は、前記するように、宗祇流口伝切紙、といっても宗祇から三条西家に入って以降の増補が多少混入している

かに思われる「切紙口伝条々」——もともとこれは冒頭の篇名で、総題とすべきではないだろうが。伝本はかなり多いが、例えば国文学研究資料館初雁文庫蔵本等には、所載される血脈に、実隆・幽齋・後西院・中院通茂らの名が見えている——から、その一部を、四丁分程度引用し、関連ある第4項に併せ記した。同じく巻末第(22)項には「切紙口伝条々」の一項「古今集内聞書」の過半、巻十七雑哥上「我うへに」詠への注以下、が引用される。但、その際原拠に存した「素純口伝明成四八月八日」「明成六年五月十五日」「文龜二年五月廿一日」などの、おそらくは三条西実隆への、東素純からのゆずりであることを示す年記が故意か偶然か脱落している。

さて、以上の序注の末尾には、小字を用いて次のような識語が記されている。後記巻末識語と合わせ考えるに、宗祇系の注・切紙が混入した、いわば旧古折衷の現形の根幹が少くとも宝永二年(一七〇五)以前には存していることが知られる。序注の基幹部分(両度聞書)を相伝したと思われる中院素然は、通勝(也足軒とも)で、細川幽齋より古今伝授、永禄元年(一五五八)生、慶長十五年(一六一〇)卒。通勝の時以来と特定はできないものの、本書のように宗祇流の墨守でなく諸注を集

成、特にやや時代逆行かとも思われる、古注を混交するのは江戸期中院家の特徴か。

右古今集の序注中院素然相伝の秘書今和哥の御家に用られ、此書を見ずしてハ一々愚注なりかたし此奥に曲文とあるハ／仙語ニよせて少しハ其意味をかけるなれと十か九ツ迄ハその深き意味をかく／して法中伝になぞらへてすさめるならんしかあれハあらかしめハ仏語／をしりそけてその余文を見へき秘中の秘也とそかゝる事／を此書にしるせるハものしれる人に似て道の狼籍なるこのならんかと。また全巻の末尾には、先ず、

此伝受秘蜜之儀者古今集之大事

天照大神和歌之三神之奥旨ヲ顯ス所成間秘而モ／可レ秘事也然に難レ有モ其方阿哥に執心深志歎レ之仍愚我誓詞を以師説之伝受之所墨紙九十五枚／に書相伝ス尤他見他言不可レ有事神明仏□之儀なればおろかならず信而可レ拜少も疑べからずものなり

宝永二乙酉年

菊月中旬

と。また丁を改め「張帛曰」として、本書には引かれない、宗

祇系切紙の一枚「八雲神詠四妙大事」に対しての更なる注記のごときもの、を付加している。即ち、

日本記疏曰此尊於是時作和哥述其心則三十一字之權奥也此哥有四妙一曰字妙二曰句妙三曰意妙四曰始終妙字妙とハ五七七皆陽数にして全体三十一字是又陽／数也句妙とハ五句陽数にして五句の内五字の短句二句は陰也七字ノ長句三句ハ陽也上下わかつ時ハ上三句陽数にして／十七字も陽数也天に□して長し下二句ハ陰数十四字もまた陰数地に□してミちかしすへて陰数なき中に陰数を具／したる事また妙なり意妙ハ八雲ハ天也妻ハ人也八重垣は／地なり三才感合ノ意也

と。依拠本文中の、いずれかの場所に貼付されていた押紙を付録として写しおいたものである。これに次いで丁を改め、鷹司政通が次のような奥書を加える。

此一冊從光政卿賈得被見以和氣信徳新写早／秘密口伝如乱書記疑敷物也

丁卯九月下旬

(花押)

光政は烏丸(日野)光政。鷹司政通と併せ前稿(玉伝深秘卷解題稿)書陵部C本の項に若干の言及がある。和氣信徳は未詳。

掲出本は、純粹に古注を書承するものではなく、旧注をも交

えた、旧古折衷の形態を呈していることは既述の通りである。

前稿「玉伝深秘巻解題稿」に於ては、本書にみられるような、旧注特に祇注との部分的とり合わせは、記述の範囲から一旦除外したのであった。前稿とは稍不統一ながら、「古今灌頂」こそ含まないがやはり古注と認定すべき秘説を引く掲出本を付説したのは、先ず分量的に数項の独行とはいわれぬ量的纏りがあることとさることながら、三輪氏や諸先学の示唆に従うならば、「取り合わせる」という態度、あるいは引用増補による重層性そのものが、中世より近世に至る、この種の伝書の有する重要な特性であり、この本の場合、増補部が祇注だからといって言及の範囲から除外すべきではあるまいと考え至ったためである。

印記「鷹司城南／館図書印」（扉中央）「宮内省／図書印」

（一丁表）

目録記載書名「古今和歌集大事秘密口伝抄」（二六六・四一七）

#### 第四類

京都大学附属図書館中院文庫蔵A本（京大A本）

〔江戸前期〕写 一帖

原本未見、斯道文庫所蔵のマイクロ・フィルムと書誌カードにより記述する。

藍色空押市松文様表紙（二四・五×一七・八cm）。外題、左肩打疊題簽「古今相伝深秘」。装丁、綴葉装。遊紙、前後各一葉。冒頭は「古今和調集相伝抄深秘蜜勘第一」。料紙、斐紙。每半葉十行、注小字双行。字面高さ約一九・五cm。墨付、四折四十丁。全体は平仮名交りを以て書かれ、まれに片仮名の振仮名等がある。まま朱合点・傍書・読点・濁点等も付す。「をかたまの木」を極彩で色どるのは他に二本を数えるが本来的なものかどうか。他に色を指示した白描の例もあり、それに従ったにすぎないとも解せる。奥書はない。

印記「男爵住友吉左衛門寄贈」（紫印、一丁表）

目録記載書名「古今相伝深秘」（院VI 57）

京都大学附属図書館中院文庫蔵B本（京大B本）

〔江戸中期〕写 大一冊

原本未見、斯道文庫所蔵のマイクロ・フィルムと書誌カードにより記述する。

本文共紙表紙（二七・六×二一・二cm）。外題を記さない。装

丁、袋綴。冒頭「古今和歌集相伝抄深秘蜜勘第一」。料紙、薄様。每半葉十一行、注小字双行。字面高さ約二二・四cm。墨付三十三丁、終丁は裏表紙見返に貼付。平仮名交りで記される。「をかたまの木」に彩色。

裏表紙見返に次の識語がある。

此書紙越前鳥子らううち也表紙にしき也／黒ぬり箱入其上桐箱入。

印記「男住友古左衛門寄贈」（紫印、一丁表）

目録記載書名「古今相伝抄深秘蜜勘」（院VI 58）

祐徳稻荷神社蔵本（祐徳本）

〔江戸中期〕写 大一冊

縹色表紙（二七・〇×一九・七cm）。外題、左肩金砂子散斐紙

題簽「古今和調集相伝抄」（後補別筆）。装丁、袋綴。遊紙、

前一葉。冒頭の小题「古今和調集相伝抄深秘蜜勘第一」。料紙、

薄手斐楮交漉紙。每半葉十行、注小字双行。字面高さ約二〇・

四cm。墨付全四十六丁。字形から判断するなら書写年次は江戸

前期寄りの中期ごろと思われる。本文全て平仮名交りを用いる。

奥書はない。

印記「直郷ノ之印」

昭和五年刊の『祐徳文庫蔵書目録』には記載がない。（整理番号は6 22 933）

群馬大学附属図書館新田文庫蔵本（群大本）

写 大一冊

原本未見、資料館蔵マイクロ・フィルムに依る所見のみを記す。

無地表紙（二六・四×一九・七cm）外題、左肩後補題簽「百今相伝秘密書」。冒頭の題「古今倭調集相伝抄深秘蜜勘第一」。每半葉十行、注小字双行。墨付四十六丁。全体に平仮名交りによって書かれている。

奥書はない。（N 911.1 ko 44）

八戸市立図書館蔵本（八戸本）

写 大一冊

原本未見、資料館蔵マイクロ・フィルムに依る所見である。

丸文繫文様表紙。外題、なし。遊紙、前後各一葉。冒頭「古今和歌集相伝抄深秘蜜勘第一」。每半葉十一行内外、注小字双行。

墨付全二十七丁。本文は平仮名交りで書かれている。

奥書は次のとおりである。

享和元酉七月十二日

唐源正鳳謹書

書写者カは未詳。

印記「南部家／旧蔵本」(前遊紙裏)

国文学研究資料館初雁文庫蔵B本(初雁B本)

〔江戸末〕写 大一冊

本文共紙表紙(二八・三×二〇・七cm)。外題、中央打付書

「古今和歌集相伝深秘抄」。装丁、袋仮綴。全巻裏打修補を施す。冒頭題は「古今和歌集相伝抄深秘竊勘第一」。料紙、楮紙。

每半葉十行、注小字双行。字面高さ約二三・五。墨付全三十一

丁。全体は平仮名交りで記される。朱墨合点・朱引・朱校等が

ある。細目に付記したように簡略化がやや顯著である。また旧

蔵者西下経一が朱筆で「池田氏本」と記しつつ小題名のみ対校

した結果を書き込む。初雁文庫本にはこうした対校本が多い。

池田氏は池田亀鑑。

奥書が詳細に記されている。三十丁表より、

右此本者綴雖為高貴人不経莫太之難行而遇甚難况於庶人乎

今察数ノ年之懇望深切目無所辞密伝之ノ是則我国神風之深旨

可謹敬之道ノ也輒随愚蒙管見必背神明冥慮ノ若得視執心之機

者唯授一人而已(一六八二)天和二年三月朔日 細川丹後守行孝判

右秘伝書慶長年中先祖幽斎櫓ノ籠于丹州田辺城之日歎此書泯

絶而則僅之加符印謹而上ノ禁裏矣上件之書篋不開符印而ノ

世鎮而後返賜于幽斎ノ帝御歌ノあけて見ぬかひそあり

ける玉手篋ノふたゝひかへすうらしまのなミノ返し

幽斎ノいにしへも今もかわらぬ世の中にノこゝろのたねを

のこすことのは

此書師伝之深重益如右是故予伝授ノ以来不及他之披覽況於書

写伝語乎ノ而今因懇切之執心難黙止速写与之ノ就中喚子鳥深

義秘中之秘伝也故ノ讓口授而不顯于書然後会難期ノ歎其遺志

而愚書加之非無僭踰罪ノ努々不可有他見他語者也穴賢(一六九一)

元録四末三月 花房右近

坂本三良兵衛殿

右深秘之伝者細川幽斎公同氏ノ丹後守殿御伝授后花房右近殿

ノ御伝授之所也予依年来之懇ノ望今相伝者也

坂本胤重

細川行孝は幽斎曾孫、寛永十四年(一六三七)生、元禄三年

(一六九〇)没。他は未詳である。有名な、伝授の断絶を危惧する後陽成院の勅旨で幽齋が戦陣死をまぬかれた出来事を引くのは、一種の権威づけであろうが、本書にはあまりふさわしくない。幽齋の古今伝授は、勿論宗祇・実隆・公条・実枝・幽齋と相承した量も大きなものであるから、本書のような古注の、それもいうならば末書は、その中心部分ではあり得ない。極端に言えば他の伝書の奥書の使い回しかとすら疑われる。

目録記載書名「古今和歌集相伝深秘抄(12160)

国立国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫蔵本(岩崎本)

〔江戸後期〕写 二帖

厚紙を淡香色の斐紙で覆い、薄墨で格子刷毛目を引いた上に、上冊は山に桜、下冊は水辺のあやめ・葦を色絵で画く表紙(二二・一×一六・九cm)。外題、中央麻葉文様金紙題簽「古今集秘書註 上(下)」。装丁、綴葉装。見返、雲母引銀切箔散斐紙。遊紙、上下冊とも前一葉、見返と同一の紙を用いる。冒頭は「古今和歌集相伝抄秘密勘第一」。料紙、布目間似合紙。每半葉九行内外、注小字双行。字面高さ約一九・二cm。墨付上冊二折、十七丁。下冊同じく二折、十七丁。全体は平仮名交り。所

引の経文に片仮名で振仮名を付すこともある。上冊末の「をか玉の木」図を色絵とする。

奥書はない。

印記「英王堂蔵書」(上下冊共一丁表)

目録記載書名「古今集秘書註」(三Fa、104)

宮内庁書陵部蔵E本(書陵部E本)

〔安政元年(一八五四)鷹司政通〕写 大一冊

元文三年(一七三八)写興正寺撰信蔵本の影写 「古今

和歌集相伝秘要密勘抄」(存序・卷八乃至卷二十注)と

の合写本の写し

本書の構成は、先ず古今集序の略抄、次に今課題とする、古今秘事の数項、さらに古今集卷八以下卷二十迄の略抄、と次第している。序注・歌注ともに引書の共通等注釈態度は一貫するらしく思われるので、選釈ながらも本来は完具したであろうある古今注の過半に「古今和歌集相伝抄深秘密勘」がすっかり取り込まれた形態と解される。

黄土色布目地正花卉文様表紙(二五・三×一八・七cm)。外題、左肩打付書「古今相伝願註密勘抄」、朱筆で「願註」を見せ

消ちとする。装丁、袋綴。後補する内題カ「古今相伝頭注蜜勘抄」。その下に「四季六卷賀部巻落冊カ／本書なし」と同筆の注記あり。続いて後記識語がしるされ、序注には題署しない。

次いで課題の秘伝書の冒頭は「古今和調集相伝抄深秘蜜勘第一」と。その諸項に続き丁を改め、三十二丁より「古今相伝頭注秘要蜜勘抄」「四季六卷賀部巻本書なし」としるし、それ以下を空白とする。第三十三丁、巻八注以下は順次「古今和調(歌)集巻第八(九・十・十一・三)相伝秘要蜜勘抄」「古今和歌集巻第十三(十四・十五・十六・十七・十八・十九)恋哥三(恋哥四・恋哥五・哀傷哥・雜哥上・雜下・雜体短歌)相伝秘要蜜勘抄」「古今和歌集巻第二十相伝秘要蜜勘抄」と題してゐる。冒頭内題に続き次の識語が存する。

此書猥に拜見する事あるへからすもとより／他の人にかたりも伝ふへからすもし心あさく／拙き人又ハ我心得顔にて物毎かるく／しく／おもふひとなどに拜見させるはわれも人も／神の御とかめにもあつかりなん和国のノ御大事なるへしと恐れ／思ひ奉るそら／おそろしき御事なり

(以下七、八字下げ) 詞つゝきわきまへかたき事／文字の正体見へかたき事／本のまゝ写し殊更人のみん／事を思ひて取

あへす写し奉る／ゆへ欵

元文三年<sup>戊午</sup>正月十三日写し終

右の中少くとも「詞つゝき……」以下は元文三年(一七三八)の書写時に加えられた識語と解せよう。

料紙、薄様。恐く影写本であろう。行数、每半葉十二乃至十六行。字面高さ約二〇・一cm。墨付全七十七丁。その内序注は二十一丁迄、遊紙を三葉はさんで「古今和調集相伝抄深秘蜜勘」が二十四丁、巻八以下の注が三十二丁である。全体は、振仮名、小字双行の注、僅かな助辞を片仮名とする以外は全て平仮名交りを以て記す。稀に濁声点を付す。

本文末葉左角に「本之通写す」とあるのはその字形が本文に変わらず、影写と考えられるから、本書依拠本に既に存したもののように思われる。次いで鷹司政通の書写奥書がしるされる。

興正寺撰信僧正秘藏之本写之

甲寅二月中旬ノ

(花押)

興正寺は浄土真宗興正派本山。もと西本願寺派というが独立志向が強く、寺主は宝曆以来、独自に本来あり得ないはずの僧正任官のことなどがあったという。撰信は当寺二十七世本寂を指す。

さて、掲出本所収の「古今和歌集相伝秘要蜜勘抄」と題される古今注につき簡略に付説しておく。

外題その他の「頭注」字は「頭注密勘」と誤解する後人の追補か、或は元文三年の折のものか。歌注の内題にはこの二字がない。

既に片桐氏が京都女子大学附属図書館吉沢文庫所蔵の、巻八以下十四迄の残巻を紹介されている（解題五）が、それに比し掲出本は書写年次は下るものの、序注・巻十五以下を有する点に独自の価値がある。ただ、この種の伝書の不合理に、既に違和を覚えている時代の手になるためか、書写態度が必ずしも動直とはいえないのは欠点とされねばならない。内容検討の結果、殊に先述するように、「朱陽抄」「（偽）文選」「（偽）文集」「（偽）日本記」「俊頼閑見集」「（偽）万葉」「文記録」「（偽）史記」「仙道記」「仙遊伝」等、就中「朱陽抄」の引用に於て序注歌注とも首尾一貫するものがあるので、一連の書と認定できよう。片桐氏のいわれるように「朱陽抄」は今に伝わらないが、「三流抄」等に記される荒唐な説話を含む古注であったようである。従って「古今和歌集相伝秘要蜜勘抄」もまた、同様の古注系列の一支脈と考えられる。今課題の「古今和歌集相伝

抄深秘密勘」と内容に同質性を認め得るとすると、この取り合わせが本来的な関係なのか、それとも内容・題名の類似が原因となった、後人の無用の手出しなのかが問題となろう。おそらくは後者の方であろうか。何故なら、「古今和歌集相伝抄深秘密勘」自体が「古今灌頂」の末流本であって、その改編の時期は鎌倉末南北朝は勿論のこと、あまり古く溯り得ないと思うからである。

印記「鷹司城南／館図書印」（一丁表）「宮内省／図書印」（二丁表）

目録記載書名「古今相伝蜜勘抄」（鷹四六八）

#### 内容細目

以上の二十五本の所収項目を列举する。篇名のない項目が大部分であるので適宜伝授目録より補い、さらに仮題を与え、もしくは冒頭の一文を題に代えるなど便宜上の処理を施した。即ち、番号はその伝本内での諸項の順を表示する一連の番号であり、「」は他本・同本他処からの補い、「」（仮題）は筆者考案の項目題である。また解題を補う意味で伝承的な奥書や血脉



を併記した他、( ) 内にも注記を加える。項目毎に多く合点を付した伝本があるが煩雑となるので省略した。

本書に於ては、第二類第一系曼殊院A本・第三類第一系大東急本・第三類第二系曼殊院B本を除き、公刊された伝本がない。特に第一類本に關しては区分の位置を明示しておくことが必要であるうと思われるので、各項目冒頭の一、二文を題に併せ引用した。第二類第一系天理A本に關しても同様である。また第二類第一系に属する曼殊院A本においては『曼殊院蔵古今伝授資料第二卷』から対応する頁数行数等を、第三類第一系に属する曼殊院B本は同書から一・二類本「古今灌頂」相当部分のそれを、同様大東急本の相当部分には、古典文庫99『中世神仏説話』所収活字翻刻本の頁数行数等を注記した。

細目

第一類

神宮文庫蔵A本(神宮A本)

古今灌頂上卷(朱)大和哥三灌頂也

1 「古今灌頂作法」(仮題)

「抑和調之道余者志人者必先哲之跡於真那部ノ可シ……」

(伝授目録) 一大和調 二六義六体 三三曲 四五句ノ五名

体 五日戸丸次第 六言実体 七五輪五仏和哥同体 八父母

二調 九三鳥三無 十一松一草

2 「大和調」カ

「一大和調ト者心詞ヲ共ニ信ヘテ大キニ和クル哥ト云ヘリ……」

3 「六義六体」カ

「又云大和哥ト者真言ヨリ出タリ……」

4 「三曲」カ

「一和調仁三曲アリ……」

聖曆乙丑生三春之天 藤原朝臣判定家

古今灌頂卷中

5 「父母二調」カ

「夫大和調与者仁之心於種与志亭諸之言ノ葉於和也……」

6 開ク花仁「の哥の事」(仮題)

「一開ク花仁思着ク身仍無益身余無常之致ノモ不知亭……」

7 「日戸丸次第」カ

「抑和歌之祖師日戸丸於何人ノ誰ノ可奉知哉……」

8 真言教之秘肝ヲ拔出シテ和調ヲ建立スル「事」(仮題)

〔二十二丁オ〕  
「阿那事モ疎カヤナ真言教之秘肝ヲ拔出シテ和調ヲ建立スル  
トカヤ……」

9 未明と仍与「の歌に三説ある事」(仮題)

〔二十三丁ウ〕  
「一未明と仍与明心底之哥説と多之先三説アリ……」

10 和調仏体人体ニ通へ「る事」(仮題)

〔二十六丁ウ〕

〔二(ア)顔之与 (ビ)〕  
四魔隠行  
〔ラ〕  
明心仍底心  
〔ウ(ン)〕  
明心之底  
四魔隠行

(ケン) 船借  
ソ念フ

此調於日戸丸之形像之哥与云へリ又ハ風心之哥トモノ言実

ノ哥トモ修徳性徳之哥トモ云へリ……」

11 若く仍調之実義図又ハ曼陀羅ト云々

〔二十八丁ウ〕  
「三若く仍調之実義図又ハ曼陀羅ト云々……」

12 明仁出現事

三十三丁オ 嵯峨天皇御代弘仁十三年・出現ト云 翁日戸磨 丸同御事大

「一明仁出現事 是ヲ翁日戸丸トモ申奈……」

宝之ノ比出現其段連ミト云云(朱)

13 心ノ六義ヲ能く悟リ知ルへ「き事」(仮題)

〔三十三丁ウ〕

「凡調於詠セン者ハ此旨ヲ可心得也心ノ六義ヲ能く悟リ知ル

へシ取レ辟ヲ為月於見セン指ヲサス……」

14 哥之五句ハ五色(ア)字ヨリ出タ「る事」(仮題)

〔三十四丁ウ〕

「又云己心胎蔵蓮花中(ア)字本来空寂淨方法ノ心起不可得  
有心無心皆成仏ト云へリ然者哥之ノ五句ハ五色(ア)字ヨ  
リ出タリ……」

聖曆乙丑三春之天 藤原朝臣 定家卿

和歌灌頂下卷

大和哥「の三の義の事」(仮題)

15 大和哥「の三の義の事」(仮題)

〔三十七丁オ〕

「抑大和哥与謂ニ様々ノ説アリ常ノ説ニアラス最深秘中ニ

と三ノ義ニ撰之ノ一大和哥 二空仮中 三法報応哥ト云へ

リノ……」

16 〔天地人・法報応と哥の三曲対応の事〕(仮題)

〔三十九丁ウ〕

天 地 人

〔ア〕〔イ〕〔ウ〕 空仮中 阿弥陀是同シ……」

法身 報身 応身 神祇 和調 人倫同之

17 六義ヲ納風体「むる事」(仮題)

〔四十丁オ〕

「抑六義ヲ納風体者実体成ル故也 実体トハ哥ノノ風即虚空法界  
心ナルヘシ  
之大哥也……」

之大哥也……」

18 人体ノ五輪ノ仏体三十一字・通ル「事」(仮題)

〔四十二丁ウ〕

「抑大日摩訶毗盧遮那仏与者是虚空遍法ノ界之大奈……」

古今之奥旨於灌頂等者庭訓之義無残所ノ相伝早努々不可伝他

家仍任師資之説ノ悉以注渡之処也最深秘中ニ穴賢ニ而巳

聖曆乙丑生三春之天 藤原朝臣判

又云 德治元年初秋天 桑門明覚判

19 古今相承血脉譜(経信以下に朱系線あり、略す)

長点

永承元年西九月十三夜月御託宣

「延喜十三年示現ト云(朱)

「不住人丸―権大納言正二位民部卿源経信  
賀茂之明神之御託宣云

從四位上土佐守源俊頼 経信子

俊頼与俊成有師弟之張其上依有親子契物也  
皇太后宮大夫藤原俊成

二条中納言藤原定家 俊成子

右衛門督藤原為家 定家子

侍從 藤原為顯 為家子

為顯ハ為氏ノ五男也

侍從 藤原為清 為顯子  
為家 為氏 為与

20 和哥ノ三曲ト云「ふ事」(仮題)

21 「吾見テモ・なにはつにの両歌梵字対応図併びに赤白の(ア)

字」(仮題)

古今灌頂卷 (朱) 不住人丸之作

1 「古今灌頂作法」(仮題)

(伝授目録)。(。印、朱)一ニハ大和謠秘伝。二ニハ三曲不思議。三ニハ六

義風納。四ニハ四人ノ丸次第。五ニハ二首人体。六ニハ五句五

輪。七ニハ和謠ノ修徳性徳之次第

2 「大和謠秘伝」

3 「三曲不思議」

4 「六義風納」

5 大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之大ナリ

6 「四人々丸次第」

7 諸ノ野謠三ツノ説「ある事」(仮題)

8 「五句五輪」(抄出カ)

9 夢人丸事

注 書誌の概要を記した際に掲出本に誤綴が発生しており、

現状や、どう正すべきかをのべたが、ここでは天理本と対

照して本来の形を示した。

第二類 第一系

静嘉堂文庫蔵本(静嘉堂本)

天理大学附属天理図書館蔵本(天理A)

古今灌頂卷 (朱) 不住人丸之作

1 「古今灌頂作法」(仮題)

(伝授目録)。(印、朱)。  
一ニハ大和調秘伝。二ニハ三曲不思議。三ニハ六

義風納。四ニハ四人々丸次第。五ニハ二首人体。六ニハ五句五輪。七ニハ和調、修徳性徳之次第

2 「大和調秘伝」

抑大和調ヨム読様有常義非最深秘中義撰之……」

3 「三曲不思議」

明和調之本來者三曲之不思議梨調道最極秘／中利輒不可聞

名字ヲモ爰多種子奈利……」

4 「六義風納」

抑六義納風体者実体成故也実体者心ナリ風ハ即虚空法界之体也故大日遍照之体トス六義即風同体表之……」

5 大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之大ナリ(前項「六義

風納」の一部か、不明なれど区切りおく)

大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之ノ大ナリ又云常住

三世淨妙法身云……」

6 「四人々丸次第」

柿本人丸何人云実説誰人可知爰四人差別ノ御坐何四人分哉  
日月生証以如此表ナリ……」

7 諸ノ野調三ツノ説「ある事」(仮題)

抑諸ノ野調三ツノ説撰ヲ人丸之御影用之……」

8 「五句五輪」(抄出カ)

抑仏之三十二相哥之五句通事人体ヨリ起／是又調ノ余風之

詞侍ヘリ……」

9 夢人丸事

夢人丸事古今著聞集云ノ粟田殿孫中納言兼隆卿子讚岐守兼房朝臣ノ好調道人磨不見事悲……」

曼殊院藏A本(曼殊院A本)

古今灌頂卷不住人丸作

1 「古今灌頂作法」(仮題)

(伝撰目録) ●一ハ大和歌秘伝 ●二ハ三曲不思議 ●三ハ六義

風納 ●四ハ四人々丸次第 ●五ハ二首人体 ●六ハ五句五輪 ●七

ハ和歌修徳性徳之次第

2 「大和歌秘伝」(173頁末行迄)

3 「三曲不思議」(176頁2行迄)

4 「六義風納」(178頁後カラ2行迄)

5 大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也(185頁1行迄)

6 〔四人と丸次第〕 (188頁1行迄)

7 諸ノ野哥三ノ説〔ある事〕 (仮題) (192頁1行迄)

8 〔五句五輪〕 (193頁末行迄)

9 夢人丸事

第二類 第二系

宮内庁書陵部蔵 A 本 (書陵部 A 本)

古今灌頂之卷

1 〔古今灌頂作法〕 (仮題)

目録

大和歌の秘伝 / 三曲不思議 / 和之六義風体 / 四四人磨

五五句五輪 / 二首人体 / 和之しゆとくせいとく

2 〔大和歌の秘伝〕

3 〔三曲不思議〕

4 〔和之六義風体〕

5 大日摩訶盧遮那へ則虚空法界の大也

6 四人磨

7 諸の歌に三の説と撰して人丸の御詠とす〔る事〕 (仮題)

8 〔五句五輪抄出〕 (仮題)

9 夢の人磨之事 (抄出)

10 ほのゝ歌の事

灌頂之卷早

住吉玉津嶋素盞鳥を入請紙等有之從 / 昔第子にて茂一國一人可有伝受此秘伝 / 之卷成間能く可有結了可秘之聊不可化見可有信処專要也取く此卷頂見 / 之時

明神等を可有供敬之心考也

和歌之主権現并和歌之祖師

住吉大明神 玉津嶋 素盞鳥尊 / 柿本人磨 赤人 関白道

長 / 宇治関白長家 二位家隆 / 后宮大夫頭輔 九条二位

行家 / 幸満丸

右大略十人余伝之由と申也 (次行より本奥書あり、前記)

(これ以下合写本の項目、参考までに記す)

古今集極秘之大事

(目録) 七ヶ之大事・三ヶ之大事・四ヶ之大事

1 〔七ヶ之大事〕 (下照姫二首之事・若くはの歌之事・やまの

への赤人の事・柿本人磨之事・猿丸大夫之事・六首之歌之

事・三鳥之事)

2 〔三ヶ之大事〕 (をかたまの木の事・やまし・天神御実名之

事)

3 「四ヶ之大事」(袖ひちての哥之事・若の浦の歌之事但序分注あり)

宇治山喜撰法師事・百和香之事

已上古今大事是にてすくへからす／こゝろさしあらむ人こあ

へてつたゆ／へからさる状如件

(二九三)  
永仁五年三月十三日／右近衛中将藤原為相朝臣判在

第三類 第一系

大東急記念文庫蔵本(大東急本)

古今和〔調〕集灌頂

1 三曲之不思議〔の事〕(仮題) (160頁8行迄)

2 大和歌〔の事〕(仮題) (162頁1行19字迄)

3 抑六義ヲ納風体〔の事〕(仮題) (163頁3行4字迄)

4 大日摩訶盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也 (166頁3行迄)

5 ホノノノノ哥兩説撰之用也 (168頁7行迄)

6 「五句五輪」 (170頁1行迄)

7 「若々仍謂之実義図」(二類本目錄の「和調修徳性徳之次第」

はこの頃を指すか) (173頁後カラ3行迄)

8 赤人出現事 (177頁末行迄)

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘曲也／然而為一類之上

依志切奉許之者也雖与千金万／錢努々不可伝他家者也最深秘

々中穴賢／不可聊余也仍奉注渡之処如件

元享三年七月日 冷泉中納言 藤原朝臣為助判在

古今和調秘伝曲文／父母哥大事

9 難波津〔の歌の事〕(仮題)

10 あさか山〔の歌の事〕(仮題)

古今相伝秘中曲文抄廿卷部

11 大調所御哥(大丈ノ哥・フルキヤマトマヒノ哥・近江フ

リ・水茎フリ・シハツフリ)

12 神遊哥(トリ物哥・ヒルメカヘシ物)

13 「東哥」(「陸奥歌」・サカミ哥・常陸帶トコ・カヒノ哥・伊勢

歌)(首欠)

古今相伝秘

14 伊冊負世取事

15 喚子鳥実義本名

16 都鳥ノ実義本名事

17 菜摘子ノ実義本名之事

18 物名山河実義本名之事

19 河名草実義本名之事

20 サカリ苔ノ実義本名之事

古今和詞集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

序

21 大和哥ト云事

22 セウト神ノ形ヲカタニウツリテカ、ヤクト云事

23 素盞烏尊トハ天照大神ノ兄也ト云事如何

24 アサカ山ノ詞ハ采女ノ戯レ

25 吉野山桜ハ人麿ノ心、雲カト覺ト云テ錦ト見玉フト云、歌アリ是如何

26 富士煙、長良ノ橋トヲ被引合事如何

古今和哥集灌頂卷一卷(尾題)

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵本(斯道本)

古今和歌灌頂卷

1 三曲之不思議〔の事〕(仮題)

2 大和哥〔の事〕(仮題)

3 抑六義、納風体〔事〕(仮題)

4 大日摩訶毘盧舍那仏者即是虚空遍法界之大也

5 保野、哥、兩説アリ

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍謂之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂 自俊成卿以来代々嫡家相伝ノ之秘術也千金莫伝也努  
不可伝他家云也敢ノ深秘ニ中 穴賢、不可聊尔也 / 仍  
渡之処如件

元亨三年七月廿日 冷泉中納言在判  
藤原朝臣為助

古今和哥秘伝曲文 父母大事

9 なにハつに〔の事〕(仮題)

10 あさか山〔の歌の事〕(仮題)

古今相伝秘中曲文抄 廿卷部

11 大掌所御哥(ヲホナヒノ哥・フルキヤマトヒノ哥・アフミ  
フリ・ミツキフリ・シハツフリ)

12 神あそひ哥(とり物の哥・ひるめかへし物)

13 東哥(みちのく哥・さかミ哥・ひたちおひ・かひ〔哥〕・  
伊せ哥)

伊せ哥)

古今相伝秘抄

14 伊那負世取之事

15 喚子鳥の実名之事

16 都鳥の実義本名之事

17 菜摘子実儀本名之事

18 物名山河実儀本名之事

19 河名草の実儀本名之事

20 サカリコケノ実儀本名之事

古今和歌集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

序

21 大和哥と云事

22 せうとの神の形をかた／＼うつりてかゝやくと云事

23 素盞尊ハ天照大神の初当也と云事

24 あさか山の詞ははうねめのたはふれ

25 吉野山の桜ハ人丸心には雲かと思ゆとゆいて哥や

26 富士の煙と 長柄の橋とを引合る事云何

27 〔付録〕(仮題)

天理大学附属天理図書館吉田文庫蔵本(天理B本)

古今和歌灌頂卷

1 三曲之不思議〔の事〕(仮題)

2 大和調〔の事〕(仮題)

3 抑六義納風体〔る事〕(仮題)

4 大日广詞ヒルサナ仏者則是虚空遍法界之大日之大也

5 ほの／＼との哥に両説撰之用之

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍謂之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡と相伝之秘術也然為ニ類之上依志之切可奉許之者也雖為ニ千金万錢之努力不レ可レ伝ニ他家者也最深秘極ノ秘也六賢ニ不可聊余也仍注渡処如件

元享三年七月廿日 冷泉院中納言 藤原朝臣為助 在判

古今和歌秘伝曲文 父母大事

9 難波津に〔の歌の事〕(仮題)

10 あさかやま〔の歌の事〕(仮題)

古今相伝秘中曲文抄 廿卷部

11 大嘗会御哥(オホナヒノ哥・フルキヤマトマイノ哥・アフ

ミフリ・ミックキフリ・シハツフリ)

12 神アソヒノ哥(トリ物哥・ヒルメカヘシモノ)



13 東哥(ミチノク哥・サカミ哥・〔常陸歌〕・カヒ哥・伊勢

哥)

〔古今相伝秘抄〕

14 伊冊負世取事

15 喚子鳥ノ実義本名之事

16 都鳥実義本名之事

17 菜摘子実儀本名之事

18 物名山川儀本名事

19 川名草実義本名事

20 サカリコケ実義本名事

古今和歌集相伝秘曲文抄当家子孫伝之序

21 和哥ト事

22 スサノヲノ尊、天照大神、コノカミ也、云事

23 吉野山、桜人、磨心、雲、オホヘト、哥ナシ

古今灌頂卷并日本記秘哥也曾以不及他見

可秘

1 大和哥と云事

2 せうトの神の形をかゝみにうつりてかゝやくと云事

3 素盞鳥尊ハ天照大神のこのかミ也と云事如何

4 アサカ山の詞ハ采母のたハふれ

5 吉野山の桜ハ人磨の心にハ雲かとおはると云て哥ハなし

6 富士の煙と長良ノ橋とを引合する事如何

古今和詞灌頂卷 藤原朝臣為助卿ノ 秘書(原尾題カ)

古今灌頂之卷并日本記秘歌也不可及他見可秘

古今和詞灌頂卷

7 三曲之不思儀〔の事〕(仮題)

8 大和哥〔の事〕(仮題)

9 抑六義ヲ納風体〔の事〕(仮題)

10 大日摩訶毘盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也

11 ほのくの哥に兩説撰之用也

12 〔五句五輪〕

13 〔若く仍詞之実義図〕

14 赤人出現事

国文学研究資料館初雁文庫蔵A本(初雁A本)

序 藤原為助卿 秘書

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘術也然而為一ノ類之上、依志之切、奉許之者也雖為ニ千金万錢、努不レ可レ

伝ニ他家ニ者也最深秘ニ穴賢ニ不可聊尔也仍注渡ノ之処  
如件

元亨三年七月廿日 冷泉中納言ノ藤原朝臣為助ノ在

判

古今和歌秘伝曲文父母之大事

15 なにはつに〔の歌の事〕(仮題)

16 あさか山〔の歌の事〕(仮題)

古今相伝秘中曲文抄廿部

17 大尊会御歌(オホナホヒの歌・ふるきヤマトマヒの哥・ア  
オホロノ異アリ)

フミフリ・ミツグキフリ・しハつふり)

18 神遊ひ歌(取物の哥・ヒルガヘンモノ)

19 東歌(陸奥哥・さかみ歌・常陸歌・かひ哥・伊勢歌)

古今相伝秘事

20 伊冊負世取と云事

21 喚子鳥の実義本名之事

22 みやこ鳥の実義本名之事

23 菜摘子の実義本名之事

24 物名山河実義本名之事

25 河名草の実義本名之事

26 サカリコチの実義本名之事

古今和調集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

宮内庁書陵部蔵B本(書陵部B本)

古今和調灌頂卷

1 三曲之不思議〔の事〕(仮題)

2 大和調〔の事〕(仮題)

3 抑六義於納風体〔る事〕(仮題)

4 大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也

5 〔ほのく哥に両説撰之用之〕

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍調之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡々相伝之秘術也／然而為一類之

上依志之切奉許之者也雖能々千金ノ錢努々不可伝他家者也

取除秘々中穴賢ニ不可聊尔也仍注渡之処如件

元亨三年七月廿日 藤原朝臣為助在判

冷泉中納言

古今和歌秘伝曲文 父母大事

9 なにはすに「の歌の事」(仮題)

10 あさか山「の歌の事」(仮題)

古今相伝秘中曲文抄廿卷部

11 大尊所御哥(おほこの・ふるきやまとまひの哥・あふみふり・みつかきふり・しはつふり)

12 神あそひ哥(とり物の哥・ひるめかへしもの)

13 東哥(ミちのへの哥・さかミ哥・ひたち帯・かひ哥・伊勢哥)

〔古今相伝秘抄〕

14 伊冊負世取事

15 喚子鳥之実義本名

16 みや古鳥の実義本名事

17 菜摘子の実義本名ノ事

18 物名山河実儀本名事

19 河名草の実義本名事

20 さかりホちの実義本名

古今和歌集相伝秘中曲文抄当家子孫秘伝有之(以上は前項の

尾に連続して記す)

古今序

21 大和哥ト云事

22 せうとの神ノ形をかたに移りてかゝやくと云事

23 すさのをの尊ハ天照大神のこの神なりと云盛事如何

24 あさか山の言葉わうねめのたはふれ

25 吉野山の桜ハ人麻呂の心には雲かとおほへと云て哥なし

26 富士の烟と長良の橋を引合らるゝ事如何

右之一冊者依為和歌之灌頂之卷予知己院/座□光明主盟被求書写予頼魯而不辨/鳥焉尊之迷然云是大秘書之儀□□我等魂/情つくし□写了

元亨三年七月廿日 藤原朝臣為助在判

宮内庁書陵部蔵C本(書陵部C本)

古今和謡秘伝曲文父母之大事

1 なには津に「の歌の事」(仮題)

2 あさか山「の歌の事」(仮題)

古今相伝秘中曲文抄

3 大尊所御哥(おほなほひの哥・ふるきやまとまひの哥・あ

ふみふり・みつくきふり・しはつ山ふり)

4 神あそひの哥(取物の哥・ひるめかへしもの)

5 東哥(陸奥哥・さかミ哥・常陸哥・甲斐哥・伊勢哥)

古今相伝秘

6 伊冊負世取と云事

7 喚子鳥之実義本名之事

8 都鳥の実義本名事

9 菜摘子の実義本名之事

10 物名山河実義本名之事

11 河名草実義本名之事

12 さかりこけの実義本名之事

古今和調集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

13 大和哥と云事

14 せうとの神の形をかたにゆうつりてかゝやくと云事

15 素盞烏尊ハ天照太神のこのかミ也と云事

16 あさか山の詞は采女のたはふれ

17 吉野の山の桜ハ人丸か心にハ雲かとおほえと云て哥ハなし

18 富士の煙と長柄橋とを引合する事如何

古今灌頂之卷并日本記秘歌也不可及他見可秘と云

古今和調灌頂卷

19 三曲之不思議〔の事〕(仮題)

20 大和調〔の事〕(仮題)

21 六義を納風体〔る事〕(仮題)

22 大日摩訶毘盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也

23 ほのくの哥に両説

24 〔五句五輪〕

25 〔若く仍調之実義図〕

26 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘術也然而一類之上依志之切奉許之者也雖為千金万銭努々不可伝他家者也最深秘六賢不可聊余也仍注渡之処如件

元亨三年七月廿日 冷泉中納言 藤原朝臣 在判

宮内庁書陵部蔵D本(書陵部D本)

古今和調灌頂卷

1 二曲之不思議〔の事〕(仮題)

2 大和調〔の事〕(仮題)

3 抑六義納云〔事〕(仮題)

4 大日摩訶毘盧遮那仏ト云者即是虚空遍法界之体也

5 ほの／＼の哥に兩説撰之用也

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍謂之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘／術也然而為一類之上  
依志（つと）切ナルニ奉許之者／也雖能与千金万錢努々不可伝他家者  
也最／深秘々中穴賢々不可聊余也仍注渡之処／如件

元亨三年七月廿一日 冷泉中納言 藤原朝臣為助在判

香川大学付属図書館神原文庫蔵本（香大本）

古今和調集灌頂

1 三曲之不思議〔の事〕（仮題）

2 大和調〔の事〕（仮題）

3 抑六義ヲ納風体〔る事〕（仮題）

4 大日摩訶毘盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也

5 ホノ／＼の哥ニ兩説撰之用也

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍謂之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘曲也／然而為一類之上

依志切奉許之者也雖与千金万／錢努々不可伝他家者也最深秘

々中穴賢々／不可聊尔也仍奉注渡之処如件

元亨三年七月日 冷泉中納言 藤原朝臣為助在判

古今和調秘伝曲文／父母哥大事

9 難波津〔の歌の事〕（仮題）

10 あさか山〔の歌の事〕（仮題）

古今相伝秘中曲文抄廿卷部

11 大調所御哥（大□哥・フルキヤマトマヒノ哥・近江フリ・

水茎フリ・シハツフリ）

12 神遊哥（トリ物哥・ヒルメカヘシ物）

13 〔東歌〕〔陸奥歌〕・サカミ哥・常陸帶（つと）・カヒノ哥・伊勢歌

（首欠）

古今相伝秘

14 伊冊負世取事

15 喚子鳥ノ実義本名

16 都鳥ノ実義本名事

17 菜摘子ノ実義本名之事

18 物名山河実義本名事

19 河名草実義本名事

20 サカリ苔ノ実義（木名事）

古今和調集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

序

21 大和哥ト云事

22 セウト神ノ形ヲカタニウツリテカ、ヤクト云事

23 素盞烏尊トハ天照太神ノ咒也ト云事如何

24 アサカ山ノ詞ハ采女ノ戯レ

25 吉野山桜ハ人麿ノ心ニハ雲カト覚テト云テ錦ト見玉フト云

ニハ哥アリ是如何

26 富士煙ト長良ノ橋トヲ被入事合如何

古今和哥集灌頂卷終

右古今灌頂雖千金万金不可伝人也若可有そ忽ノ之伝者ハ神罰

其恐可多也可秘々哥道之趣不可過之穴賢

九州大学附属図書館細川文庫蔵本（九大本）

古今灌頂之卷

1 三曲之不思議（の事）（仮題）

2 大和哥（の事）（仮題）

3 抑六儀をおさむる風体（の事）（仮題）

4 大日摩訶（びろし）やな仏則是こくうへん法界也

5 ほのくの哥（に）両説撰之用

6 〔五句五輪〕

7 〔若く仍謂之実義図〕

8 赤人出現事

右灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝也秘術也然者為一類之上心ざしのこうによつてゆるしたてまつるもの也  
雖為千金万銭努／努不可伝他家最源秘々中也穴賢不可

可ニ聊余也仍注渡処如件

元享三年七月廿日

冷泉中納言 藤原朝臣為兼判

古今和哥秘伝文父母大事

9 難波津（の歌の事）（仮題）

10 あさか山（の歌の事）（仮題）

〔古今相伝秘中曲文抄 廿卷部〕（小題欠）

11 大嘗所御哥（大なひの哥）・古大和舞のうた・あふみふり

水くきふり・しハつふり

12 神遊哥（とりものうた）・ひるめかへしもの

13 「東哥」(さがみの哥・「かひうた」・伊勢哥)(有欠)

〔古今相伝秘抄〕(小題欠)

14 伊冊負世取事

15 喚子鳥の実儀也之事

16 都鳥の実体本名の事

(有欠)

序

17 和哥と云事

18 せうとの神のかたちをかたにうつりてかどやくと云事

19 すさのおのみことへ天照大神のこのかミ也と云事いかん

20 あさか山のことうねめのたハむれ

21 吉野山の桜ハ人丸の心にハ雲かとおぼへて哥なし

22 富士のけふりとながらのはしとを引合てする事いかん

右古今灌頂卷 并 日本記秘歌也可レ秘

我覚本不生 (ア) 地ぢ / 出過語言道 (ビ) 水す

い / 諸過得解脱 (ラ) 火くわ / 遠離方因縁 (ウ)

ん) 風ふう / 智空等虚空 (ケン) 空くう

国立公文書館内閣文庫蔵本(内閣本)

古今秘伝抄 乾

1 〔古今秘伝抄前置〕(仮題)

2 古今ノ二字ノ義十二徳アリ

3 古今ノ秘事阿古根ノ浦ノ大事

4 〔和歌集と金台蘇大日と一致する事〕(仮題)

5 和哥六体アリ

古今和詞灌頂卷

6 三曲之不思議〔の事〕(仮題)

7 大和詞〔の事〕(仮題)

8 抑六義ヲ納風体〔る事〕(仮題)

9 大日摩訶毘盧遮那仏者即是虚空遍法界之大也

10 ホノくノ哥ニ両説撰之用之

11 〔五句五輪〕

12 〔若く仍詞之実義図〕

13 赤人出一現事

右灌頂自俊成卿ノ以来代々家嫡相伝之秘術也然而為ニ  
一類之上ノ依志切奉許之者之雖為ニ千金万錢努  
不可レ伝ニ他家ニ者也取モ深秘ニ穴賢云不可レ聊余ニ也

／仍注渡ノ処如レ件

元亨三年七月廿日

俊成卿

冷泉中納言藤原朝臣在判

(本奥書有り、前記)

古今秘伝抄乾(乾巻尾題)

古今秘伝抄坤

古今和歌秘伝曲文父母之大事

14 ナニハツニ〔の歌の事〕(仮題)

15 アサカ山〔の歌の事〕(仮題)

古今相伝秘中曲文抄廿部

16 大嘗所御哥(オホホナビノ歌・フルキヤマトマイノ哥)  
ヲホコノ異本アリ

古今灌頂ノ巻下(異本の書入カ)

フ畝  
(アリミフリ・ミツグキフリ・シハツフリ)

17 神アソビノ哥(取物ノ哥・ヒルメカヘシモノ)

18 東歌(奥州哥・サガミ哥・ヒタチ哥・カヒ哥・伊勢哥)

古今相伝秘

19 伊冊負世鳥取ト云事  
イナフホキド

20 喚子鳥実義本名ノ事

21 都鳥ノ実義本名ノ事

22 菜摘子ノ実義本名ノ事

23 物名山河実儀本名ノ事

24 河名草ノ実義本名ノ事

25 サカリコケノ実義本名事  
テ異本アリツルサウ也

古今和謡集相伝秘中曲文抄当家子孫孫伝之

序

26 大和哥ト云事

27 セウトノ神ノ形ヲカタニ、ウツリテカ、ヤクト云事

28 素盞鳥ノ尊ハ天照大神ノコノカシカシ也ト云事如何

9 2 アサカ山ノ詞ハ采女ノタハフレ

30 吉野山ノ桜ハ人丸ノ心ハ雲カトヲホユト云テ哥ハナシ

31 富士ノ煙ト長良ノ橋トヲ引合スル事如何

古今灌頂之巻并日本記秘歌也不可及他見ノ可秘云々

32 和哥印信

古今秘伝抄坤終(坤巻尾題)

右乾坤之秘伝者俊成卿嫡男相之旨奥也ノ聊尔耳可加正意而注

渡書之切不可尽意仍ノ甚深之奥伝右如書也

元亨三年七月廿日

冷泉中納言藤原朝臣為相在判



神宮文庫蔵B本(神宮B本)

古今秘伝抄 乾

1 [古今秘伝抄前置] (仮題)

2 古今ノ二字ノ義十二徳アリ

3 古今ノ秘事阿古根ノ浦ノ大事

4 [和歌集と金台蘇大日と一致する事] (仮題)

5 和哥ニ六体アリ

古今和歌灌頂卷

6 三曲之不思議

7 大和詞[の事] (仮題)

8 抑六儀ヲ納風躰

9 大日摩訶毘盧庶那<sup>(ついで)</sup>仏者即是虚空遍法界之大也

10 ホノくノ哥ニ両説撰之用<sup>云</sup>

11 [五句五輪]

12 [若く仍謂之実義図]

13 赤人出現事

右ノ灌頂自俊成卿以来代々家嫡相伝之秘術也然而為ノ一類之

上依志切奉許之為也雖為千金万錢努々不可伝他家者也取モ

深秘<sup>云</sup>、穴賢<sup>云</sup>、不可聊余也仍注ノ渡之処如件

元亨三年七月廿日

俊成卿

冷泉中納言藤原朝臣在判

(本奥書有り、前記)

古今秘伝抄乾(乾巻尾題)

古今秘伝抄坤

古今秘伝曲文父母之大事

14 ナニハツニ[の歌の事] (仮題)

15 アサカ山[の歌の事] (仮題)

古今相伝秘中曲文抄廿部

16 大嘗所御哥(ヲホナヒノ歌・フルキヤマトマイノ哥)  
ヲホコノ異本アリ  
ホイ本アリ

古今灌頂ノ巻下

(アリシフリ・ミズグキフリ・シハツフリ)  
本ノマ、アフミフリ歌

17 神アソヒノ哥(取モノ、哥・ヒルメカヘシモノ)

18 東歌(奥州哥・サカミ哥・ヒタチ哥・カヒ哥・伊勢哥)

古今相伝秘

19 伊冊負世鳥<sup>イナホネセトリ</sup>

20 喚子鳥ノ実儀本名ノ事

21 都鳥ノ実義本名ノ事

22 菜摘子実義本名事

23 物名山河実儀本名ノ事

24 河名草ノ実義本名ノ事

25 サカリコケヲ異本ニアリツルサウ也ノ実義本名事

古今和歌集相伝秘中曲文抄当家子孫伝之

(以下序注欠)

右乾坤之秘伝者俊成卿嫡男相之旨ノ奥也聊尔耳可加正意而注  
渡書ノ之切可尽意仍甚深之奥伝右ノ如書也

元亨三年七月廿日

冷泉中納言藤原朝臣在判

曼殊院蔵 B 本 (曼殊院 B 本)

古今秘抄 (扉)

1 「古今秘抄前置」(仮題)

2 古今二字義十二徳アリ

3 古今秘事阿古根浦之大事 (108頁5行迄)

4 「和歌集と金台蘇大日と一致する事」(仮題)

5 和哥六体アリ

古今和歌集灌頂卷

6 三曲之不思議「の事」(仮題) (113頁4行迄)

7 大和譚「の事」(仮題) (114頁1行迄)

8 抑六義納風体「の事」(仮題) (114頁後カラ2行迄)

9 大日摩訶毗盧遮那仏者即是虚空法界大日也 (117頁7行迄)

10 若ク両説撰レ之用也 (119頁8行迄)

11 「五句五輪」 (121頁6行迄)

12 「若ク仍譚之実義図」 (124頁6行迄)

13 赤人出現事 (128後カラ3行迄)

右灌頂卷自ニ俊成卿以来代々家嫡相伝シ秘曲也然為ニノ一類之上ニ依ニ志之功ニ奉レ許レ之者也雖レ然千金万錢ナリモ努々ノ不可レ伝者也最深秘中穴賢ニ不レ可聊尔者也仍奉ニ注レ渡レ之処如件元亨三年七月廿日冷泉中納言藤原朝臣ノ為相如件(一字分空白の後に本奥書有り、前記)

古今和哥秘伝曲文父母譚大事

14 難波津「の歌の事」(仮題)

15 アサカ山「の歌の事」(仮題) (132頁1行迄)

古今相伝秘中曲文抄卷部

16 大哥所御哥 (オホナウ哥・フルキヤマトマヒ哥)

古今灌頂卷下

(アフミフリ・ミツクキフリ・シハツフリ)

17 神アソヒノ哥 (ヒトリ物・ヒルメカヘシモノ)

18 アツマ哥 (ミチノクノ哥・サカミ哥・ヒタチヲヒ・カヒ哥・イセ哥)

イセ哥)

古今相伝秘

19 伊冊夏世取事

20 喚子鳥之実義本名

21 都鳥之実義本名之事

22 菜摘子実義本名事

23 三種宝実義本名事

24 河名草実義本名事

25 サカリコケ実義本名事

古今和哥集相伝秘曲文抄終 (尾題)

〔序〕

26 大和哥ト云事

27 セウトノ神ノ形岡谷ウツリテカ、ヤクト云事

28 素盞鳴尊ハ天照太神ノコトカミト云事如何

29 アサカ山ノコトハウネメノタハフレ

30 吉野山桜ハ人丸心ハ雲カトヲホユルト云ニハ哥ナシ

31 富士煙長良橋トヲ引合ラル、事如何

32 和哥印信

付説

宮内庁書陵部蔵「古今和歌集大事秘密口伝抄 (外題)」

古今和歌秘伝曲文 父母大事

1 難波津に「の歌の事」(仮題)

2 あさかやま「の歌の事」(仮題)

古今相伝秘中曲文 (「文」字に濁点)

3 大哥所御歌 (おほなほひの御哥)

古今灌頂秘伝曲文抄

4 伊那負世取之事

5 喚子鳥の実義本名

6 都鳥本名実義

7 菜摘子の実義本名事

8 物名山河実義本名事

9 河名草実義本名事

10 さがりこけの実儀本名事 (「儀」字に濁点)

古今和歌集大事秘密、口伝条々切紙、「大」字「事」字共に濁点

(11) 御賀玉の木之事 三之口伝之内私云表書也

(12) めとにけづり花の事

(13) 加和名種之事

(14) 三鳥之事 (ももち鳥・喚子鳥・いなおほせ鳥)

(15) ミたりの翁の事

古今和歌集相伝秘中曲文抄当家／子孫伝之序「文」字に濁点

16 大和哥と云事

17 せうとの神の形をかたにうつりてかやくと云事

18 すさのおの尊へ天照太神のこのかみ也と云事

19 あさか山のことバ、采女のたはふれ

20 吉野山の桜人磨の心には雲かとおほへてと云て哥なし

21 富士の煙と長良の橋とを引合る事如何

(22) 「古今集内聞書」(首欠)

古今和歌集相伝抄深秘密勘第一

1 三曲のふしき「の事」(仮題)

2 和詞「の事」(仮題)

3 抑六義を納る風体「の事」(仮題)

4 大日摩訶毗盧遮那仏へ則是虚空法界の大也(抄出)

古今相伝秘中曲文抄巻部

5 大哥所御詞(おほなひの哥・ふるきやまと舞の哥・近江ふり・水丞・しはつ山)

6 神あそひ哥(とり物歌・ひるめかへしもの)

7 あつま哥(みちのく哥・さかみ哥・常陸おひ・かひ哥・伊勢哥)

古今相伝秘事奥之書

8 伊冊負世取の事

古今秘伝抄物の名殿内録秘書す

(9) かさりちまき

(10) まなしらこ

(11) いか葉なすひ

(12) つくりなすひ

(13) をかたまの木の実体本名事

第四類

京都大学附属図書館中院文庫蔵A本(京大A本)

- (14) め<sup>め</sup>のけつり花
- (15) 川名草の実体本名事
- (16) 河名草のつくり様の事草七木七ツ也  
七草七木の大事 内裏の殿内抄
- (17) 〔七草の事〕(仮題)
- (18) 七木の事
- 19 喚子鳥の実義本名
- 20 都鳥の実体本名事
- 21 菜摘子の実義本名少々
- 22 物の名山川実義本名事
- 23 河名草実義本名事
- 24 さかりこけの実義本名事
- 古今和歌集相伝秘中曲文抄当家の子孫伝也
- 25 大和哥と云事
- 26 神の形をかたなに似うつり耀と云事
- 27 そさのをの尊は天照太神のこのか<sup>か</sup>なりと云事<sup>?</sup>
- 28 あさか山のことのはと采女の戯
- 29 よしの山のさくらは人丸の心には雲かとおほえてといふなり
- (9) かざりちまぎ
- 30 富士のけふりと長良の橋とハおなし様に引合せらるゝこと  
ハいかに
- 1 三曲のふしき〔の事〕(仮題)
- 2 和詞〔の事〕(仮題)
- 3 抑六儀を納る風体〔の事〕(仮題)
- 4 大日摩訶毗盧遮那仏ハ則是虚空法界大也(抄出)
- 古今相伝秘中曲文抄巻部
- 5 大哥所御詞(おほなひの哥・ふるきやまと舞の哥・近江ふり・水茎・しはつ山)
- 6 神あそひ哥(とり物哥・ひるめ<sup>ひるめ</sup>ハへしもの)
- 7 あつま哥(ミちのく哥・さかみ哥・常陸<sup>とつご</sup>おひ・かひ哥・伊勢哥)
- 8 古今相伝秘事奥之書  
伊冊負世取の事
- 古今秘伝抄物の名殿内録に秘書す
- 京都大学附属図書館中院文庫蔵B本(京大B本)
- 古今和歌集相伝抄深秘密勘第一

- (10) まなしらこ
- (11) いか葉なすひ
- (12) つくりなすひの事
- (13) をかたまの木の実体本名事
- (14) めミ(つた)のけつり花
- (15) 川名草の実体本名事
- (16) 川名草のつくり様の事草七木七ツ也  
七草七木の大事内裏の殿内抄
- (17) 〔七草の事〕(仮題)
- (18) 七木の事
- 19 喚子鳥の実義本名
- 20 都鳥の実体本名事
- 21 菜摘子の実義本名少く
- 22 物の名山川実義本名之事
- 23 河名草実義本名の事
- 24 さかりこけの実義本名事
- 古今和歌集相伝秘中曲文抄当家の子孫伝也
- 25 大和哥と云事
- 26 神のかたち形をかたな(かた)ハ似う(に)つり耀(こ)とは事

- 27 そさのをの尊ハ天照大神のこのかミなりといふ事いかん
- 28 あさか山のことのはミ采女の戯
- 29 よし野山の桜ハ人丸の心にハ雲かとおほえてといふなり
- 30 富士のけふりと長良の橋とハおなし様に引合らるゝことハ  
いかに

祐徳稻荷神社蔵本(祐徳本)

古今和謡集相伝抄深秘密勘第一

- 1 三曲のふし(つた)〔の事〕(仮題)
- 2 和哥〔の事〕(仮題)
- 3 抑六義を納る風体〔の事〕(仮題)
- 4 大日摩訶毗盧遮那仏ハ則是虚空法界の大也(抄出)
- 古今相伝秘中曲文抄巻部
- 5 大哥所御謡(おほなほひの哥・ふるきやまと舞の哥・近江  
ふり・水茎・みつ(つた)つき・しは(つた)つふり)
- 6 神あそひ哥(とり物うた・ひるめかへしもの)
- 7 あつま哥(ミちのく哥・さかミ哥・常陸(つた)おひ・かひ哥・伊  
勢哥)
- 古今相伝秘事奥之書

8 伊冊負世取の事

古今秘伝抄物の名殿内録に秘書す

(9) かざりちまき「の事」(仮題)

(10) まなしらこ

(11) いか葉なすひ

(12) つくりなすひ

(13) をかたまの木の实体本名事

(14) めとのけつり花

(15) 河名草の实体本名事

(16) 河名草のつくり様の事草七木七ツ也

七草七木の大事内裏の殿内抄

(17) 「七草の事」(仮題)

(18) 七木の事和殿抄内秘本相伝可秘

19 喚子鳥の实義本名

20 都鳥の实体本名事

21 菜摘子の实義本名少々

22 物の名山川実義本名事

23 河名草実義本名事

24 さかりこけの实儀本名事

古今和哥集相伝秘中曲文抄当家的子孫伝なり

25 大和哥と云事

26 神の形をかたなに似うつるつら耀と云事

27 そさのをの尊ハ天照大神のこのかミなると云事いかん

28 あさか山のことはよ采女の戯

29 よしの山のさくらハ人丸の心にハ雲かとおほえてといふなり

30 富士のけふりと長良の橋とハおなし様に引合らるゝことハいかに

群馬大学附属図書館蔵本(群大本)

古今倭謡集相伝抄深秘密勘第一

1 三曲のふし「の事」(仮題)

2 和哥「の事」(仮題)

3 抑六義を納る風体「の事」(仮題)

4 大日摩訶毗盧遮那仏ハ則是虚空法界の大也(抄出)

古今相伝秘中曲文抄巻部

5 大哥所御哥(おほなほひの哥・ふるきやまと舞の哥・近江ふり・水茎・しはつふり)

6 神あそひ哥(とり物哥・ひるめかへしものよ)

7 あつま哥(ミちのく哥・さかみ哥・常陸おひ・かひ哥・伊勢哥)

古今相伝秘事奥之書

8 伊冊負世取の事

古今秘伝抄物の名殿内録に秘書す

(9) かさりちまき

(10) まなしらこ

(11) いか葉なすひ

(12) つくりなすひの事

(13) をかたまの木の実体本名事

(14) めとのけつり花

(15) 川名草の実体本名事

(16) 河名草のつくり様の事草七木七ツ也

七草七木の大事内裏の殿内抄

(17) 「七草の事」(仮題)

(18) 七木の事 和殿抄内秘本相伝テ可秘

19 秘喚子鳥の実義本名

20 都鳥の実体本名事

21 菜摘子の実義本名抄々

22 物の名山川実義本名事

23 河名草実義本名事

24 さかりこけの実義本名事

古今和哥集相伝秘中曲文抄当家の子孫伝なり

25 大和哥と云事

26 神の形をかたなに似たる耀と云事

27 そさのをの尊ハ天照太神のこのかミなると云事いかん

28 あさか山のことのは、采女の戯

29 よしの山のさくらハ人丸の心におほえてといふなり

30 富士のけふりと長良の橋とハおなし様に引合らるゝことハ  
いかに

八戸市立図書館蔵本(八戸本)

古今和歌集相伝抄深秘蜜勘第一

1 三曲の不思議「の事」(仮題)

2 和歌「の事」(仮題)

3 抑六儀を納る風体「の事」(仮題)

4 大日摩訶毗盧遮那仏ハ則是虚空法界の大也(抄出)



古今相伝秘中曲文抄巻部

- 5 大哥所御謡（「おほなほびの歌」・ふるきやまと舞のうた・近江ふり・水茎・しはつふり）
- 6 神あそひの哥（とり物哥・ひるめ哥かへしものゝ哥）
- 7 東哥（ミちのく哥・さかミ哥・常陸哥・甲斐哥・伊勢哥）
- 古今相伝秘事奥之書
- 8 伊冊負世取之事
- 古今秘伝抄物の名殿内録に秘書す
- 9 かさり粽
- 10 まなしらこ
- 11 いか葉なすひ
- 12 つくりなすひ
- 13 おかたまの木の实体本名の事
- 14 めとのけつり花
- 15 川名草の实体本名之事
- 16 河名草のつくり様の事草七木七なり
- 「七草七木の大事」
- 17 「七草の事」（仮題）
- 18 七木之事

19 呼子鳥の実義本名

- 20 都鳥の实体本名之事
- 21 菜摘子の実義本名
- 22 物の名山川実義本名の事
- 23 河名草実儀本名之事
- 24 さかりこけの実義本名之事
- 古今和歌集相伝秘事曲文抄当家の子孫伝也
- 25 大和哥と云事
- 26 神の形をおかたなに似うつる耀と云事
- 27 そさのをの尊ハ天照太神の兄（あに）なると云事いかん
- 28 あさか山（あさか）のことは、采女の戯と云
- 29 よし野山の桜ハ人丸の心（こころ）にハ雲かとおほへたと云なり
- 30 富士のけふりと長良の橋とハおなし様に引合せらるゝ事ハ  
いかに
- 国文学研究資料館初雁文庫蔵B本（初雁B本）
- 古今和歌集相伝抄深秘蜜勘第一
- 1 三曲の不思議「の事」（仮題）（欠後半）
- 2 和歌「の事」（仮題）（欠後半）

古今相伝秘中曲文抄巻の部

3 大歌所(おほないの哥)・古きやまと舞の哥・近江ふり・水  
茎・し(はつ山)

4 神遊哥(とり物)・ひるめ(久しもの)

5 あつま哥(ミちのく哥)・さかミ哥・常陸帯(つと)・甲斐哥・伊勢  
哥)

古今相伝秘事奥之書

6 伊冊負せとりの事(尾欠)

古今秘伝抄物の名殿内録に秘書す

(7) かさ(り)ち(ま)ま(き)「の事」(仮題)

(8) ま(な)し(ら)

(9) い(か)葉(な)す(ひ)

(10) つ(く)り(な)す(ひ)の事

(11) おかた(ま)の(木)の(実)体(本)名(之)事

(12) め(ミ)の(け)つ(り)花

(13) 川名(草)の(実)体(本)名(之)事

(14) 川名(草)の(作)り(様)へ(草)七(木)七(なり)

「七草七木の大事」

(15) 「七草の事」(仮題) (欠前半)

(16) 七木の事

17 喚子鳥(の)の(実)義(本)名(不)書(注)文

18 都鳥(実)体(本)名(之)事

19 菜摘(子)の(実)義(本)名(少)也

20 物(の)名(山)川(実)儀(本)名(之)事

21 河名(草)実(儀)本(名)事

22 さ(か)り(こ)け(の)の(実)儀(本)名(之)事

古今和歌集相伝秘中曲文抄当家子孫伝也

23 大和哥(と)言(事)

24 神(の)か(た)ち(を)か(た)な(に)似(う)つ(り)輝(と)ハ(事)

25 素(蓋)鳥(尊)ハ(天)照(太)神(の)兄(とい)ふ(事)い(かん)

26 よ(し)の(山)の(桜)ハ(人)丸(の)め(に)ハ(雲)か(と)お(ほ)へ(て)と(言)也

27 富(士)の(け)ふ(り)と(長)柄(の)橋(と)ハ(お)な(し)や(う)に(ひ)き(合)ら(る)こ(と)

ハ(い)かん

28 喚(子)鳥(の)事(17項注文を書入る)

国立国会図書館支部東洋文庫岩崎文庫蔵本(岩崎本)

古今和歌集相伝抄秘密勘第一

1 三(曲)の(ふ)し(の)事(仮題)

- 2 和哥〔の事〕(仮題)
- 3 抑く六儀を納風体〔の事〕(仮題)
- 4 大日摩訶毘盧遮那仏八則これ虚空法界の大なり(抄出)  
古今相伝秘中曲文抄巻部
- 5 大謔所御哥(おゝなほの哥・古き大和舞の哥・あふみふり・水茎・しはつふり)
- 6 神遊ひ哥(とり物哥・〔ひるめかへしもの〕)
- 7 東ま歌(陸奥の哥・相模哥・常陸帶・甲斐歌・伊勢哥)  
古今相伝秘事奥書
- 8 伊那負世取の事  
古今秘伝抄物名殿内録秘書
- (9) 飾りちまき〔の事〕(仮題)
- (10) まなしらこ
- (11) いか葉茄子
- (12) 作り茄子
- (13) をか玉の木の木の実体本名の事(彩色図あり)  
(以下下冊)
- (14) 「をか玉にする柱の包ミやうのこと」(13項後半)  
めとのけつり花
- (15) 川名草の実体本名のこと
- (16) 川名草の作やうの事草七種木七本なり  
七草七木の大事内裏の殿内抄
- (17) 〔七草の事〕(仮題)
- (18) 七木の事と殿抄内秘本相伝にて可秘
- 19 喚子鳥の実体本名
- 20 都鳥の実体本名
- 21 菜摘子の実儀本名
- 22 物の名山山川実儀本名の事
- 23 河名草実体本名
- 24 さかりこけの実儀本名  
古今和哥集相伝秘事曲文抄当家の子孫伝なり
- 25 大和哥と云事
- 26 神の形を片名に似たる耀と云
- 27 そさのをの尊は天照大神の兄と云こといかん
- 28 浅香山の言葉と采女の戯れと云
- 29 吉野山の桜は人丸の心にハ雲かと覚へてと云なり
- 30 富士の煙と長柄の橋とは同じやうに引合らるゝ事ハいかに

宮内庁書陵部蔵 E 本 (書陵部 E 本)

古今和調集相伝抄深秘蜜勘第一

1 三曲のふしき〔の事〕(仮題)

2 大和調〔の事〕(仮題)

3 六義を納る風体〔の事〕(仮題)

4 大日摩訶毗盧遮那仏ハ則是虚空法界の大也

古今相伝秘中曲文抄巻部

5 大哥取御調所(おほなひ本ノマの哥・ふるきやまと舞の哥・近江ふ

り・水ついで・しはつ山)

6 神あそひ哥(とり物哥・ひるめかへしもの)

7 あつま哥(みちのく哥・さかみ哥・常陸おひ・かひ哥・伊

勢哥)

古今相伝秘事奥之書

8 伊冊負世取の事

古今秘伝抄物の名殿内録秘事す

(9) かざりちまき

(10) まなしらこ

(11) いか葉なすひ

(12) つくりなすひの事

(13) をかたまの木の実体本名事

(14) めとのけつり花

(15) 川名草の実体本名事

(16) 河名草のつくり様の事草七木七ツ也

七草七木の大事 内裏の殿内抄

(17) 〔七草の事〕(仮題)

(18) 七木の事 初殿抄内秘本相構て可納い

19 喚子鳥の実義本名

20 都鳥の実体本名事

21 菜摘子の実義本名少々

22 物の名山川実義本名事

23 河名草実義本名事

24 さがりごげの実義本名事

古今和哥集相伝秘中曲文抄当家の子孫伝也

25 大和哥と云事

26 神の形をかたに似うつりあやと云事

27 そさのをの尊ハ天照太神のこのかミなりと云事

28 あさか山のことの葉ハ采女の戯

29 よし野山のさくらハ人丸の心にハ雲かとおほへてといふなり

30 富士の烟と長良の橋とハ同じ様に引合せらるゝ事ハいかに

細目対照表

以上の通り詳記した諸本項目の配列の差、出入を示すのが以下の表である。神宮A本の配列に従い、各類の代表的伝本の相当項を下に配する。但三類本・四類本の増補部分は除外した。前記細目の比較のみでその異同は十分明らかであると判断したからである。番号は細目対応の通し番号、記号等の意味は次の通り。△符||篇名・目録はあるが、一類本と相違している。前||一項目の前半部分を指す。後||同じく一項目の後半部分を指す。抄||本文が簡略化している。

末尾に神宮A本にない項を一括した。しかし勿論、三・四類本の増補部は含んでいない。

閲覧をゆるされた所蔵諸機関関係者の方々並びに学恩を被る諸先生に深謝申し上げる。

神宮A		第一類			
古今灌頂上巻					
1	〔古今灌頂作法〕(仮題)				
2	〔大和詞〕カ				
3	〔六義六体〕カ				
4	〔三曲〕カ				
古今灌頂巻中					
5	〔父母二詞〕カ				
5前	4	2	△	1	△
4前	3	2	△	1	△
3前	1	2			△
8前	6	7			△
3前	1	2			△
天書		第二類		系系	
理部		第第		一二	
A A					
大内		第三類		系系	
東急		第第		一二	
閣					
京大		第四類			
A					

- 6 開々花仁〔の哥の事〕(仮題)
- 7 〔日戸丸次第〕カ
- 8 真言教之秘肝ヲ拔出シテ和調ヲ建立スル〔事〕(仮題)
- 9 未明々仍与〔の歌に三説ある事〕(仮題)
- 10 和調仏体人体ニ通へ〔る事〕(仮題)
- 11 若々仍調之実義図又ハ曼陀羅ト云々
- 12 明仁出現事
- 13 心ノ六義ヲ能々悟リ知ルヘ〔き事〕(仮題)
- 14 哥之五句ハ五色(ア)字ヨリ出タ〔る事〕(仮題)
- 和歌灌頂下巻
- 15 大和哥〔の三の義の事〕(仮題)
- 16 〔天地人・法報応と哥の三曲対応の事〕(仮題)
- 17 六義ヲ納風体〔むる事〕(仮題)
- 18 人体ノ五輪ノ仏体三十一字通ル〔事〕

5前 5前	4後 4後		5後 5後		8後	8前 8	7 7	6後抄 6後抄	6前抄 6前抄
4前 9前	3後 8後		4後 9後	8前 13前	7 12	6前 11前	5 10		
4抄	3後								

(仮題)

19 古今相承血脉譜

20 和哥ノ三曲ト云〔ふ事〕(仮題)

21 〔吾見テモ・なにはつにの両歌梵字対応  
図併びに赤白の(ア)字〕(仮題)

		9 9抄	
8後 13後	5	~	1 内題